ま ま した い せき
ママ下遺跡

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

ま　ま　した　い　せき
マ　マ　下　遺　跡

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

調査区全景

ママ下遺跡上区

序

ママ下遺跡が位置する上郷地区は飯田市の北部にあり、天竜川河岸から木曽山脈前山の麓までの東西に細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に比較的広い耕地が広がっています。このような地形を活かして古の時代より人々は生活し、多くの文化・伝統をこの地に残してきました。例えば、その中のひとつが300年余り続く人形浄瑠璃の黒田人形芝居です。下黒田諏訪神社の祭礼で毎年奉納上演され、人々を楽しませてきました。

上郷地区は元来農業を基盤とする地域でありましたが、飯田市街地に近いことや、農業後継者の不足等から、最近では宅地化が急速に進んでおります。また、道路も国道153号バイパス・県道飯島飯田線バイパス等が建設されるなど交通の便も良くなり、日に日にその姿を変えております。今次調査された場所も水田として利用されていた所ですが、大型店舗が建設されるなど時代の流れを感じさせられます。しかし、開発と同時に文化財の保護という面も考えなければならず、このような相容れない事態に直面することが多くなっています。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図る事もやむを得ないことといえましょう。

今回の調査では古墳時代の住居址が12軒発掘され、人々が古くからこの地で生活していたことがわかってきました。また、北側で厚く堆積している砂の層を確認し、近くを流れる土曽川が何回も氾濫を繰り返して人々の生活に影響を与えていたこともわかりました。

文化財の保護と活用は、文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんの活発な生涯学習、地域学習の中で、自分たちの先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私たち文化財行政・教育行政に携わる者はこのような要望に応え、市民の皆さんにご理解をいただきながら、一体になった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた地権者の皆様、㈱ダイナム、㈱丸三建設をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成15年３月

飯田市教育委員会
教育長　冨　田　恭　啓

例　言

1．本書は、株式会社　ダイナムによる店舗建設に伴う埋蔵文化財包蔵地「ママ下遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は株式会社　ダイナムから委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は平成13年度に現地での調査を行い、平成14年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．発掘調査及び整理作業にあたり、遺跡略号にMMS1400を用いた。また、遺構については以下の略号を使用している。
竪穴住居址－ＳＢ　不明遺構－ＳＸ　土坑－ＳＫ　建物址－ＳＴ　溝址－ＳＤ

5．ママ下遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、ＬＣ－75に位置し（社団法人日本測量協会1969「国土基本図図式　同適用規定」参照)、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて株式会社ジャステックに委託した。

6．本書の記載は、時代毎に住居址・土坑・建物址・溝址・氾濫原の順としている。

7．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面･床面からのそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。

8．住居址の遺構図において、焼土・貼床の範囲にスクリーントーンを付した。
焼土　貼床

9．実測図中、須恵器の断面は黒塗りしている。

10．土層の色調・土性については、小山正忠・竹原秀男　1996『新版標準土色帖』を用いている。

11．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により坂井・羽生が行った。

12．本書の執筆と編集は担当調査員の協議により坂井・羽生が行い、小林正春が総括した。

13．本書の写真について、遺構は坂井・羽生が撮影し、遺物については西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。

14．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004－１番地飯田市考古資料館で保管している。

目　次

本文目次

序
例言
目次

第１章　経　過
第１節　調査に至るまでの経過……1
(1)　試掘調査の結果……1
第２節　調査の経過……5
(1)　調査日誌……6
第３節　調査組織……7
(1)　調査団……7
(2)　事務局……7

第２章　遺跡の環境
第１節　自然環境……9
第２節　歴史環境……9

第３章　調査結果
第１節　調査区の設定……14
第２節　基本層序……14
第３節　遺構・遺物
(1)　住居址
①４号住居址……16
②５号住居址……16
③６号住居址……18
④７号住居址……18
⑤８号住居址……18
⑥９号住居址……18
⑦12号住居址……20
⑧16号住居址……20
⑨17号住居址……20
⑩19号住居址……20
⑪10号住居址……20
⑫18号住居址……22
⑬竪穴状遺構……22
(2)　土坑
①土坑01……22
②土坑02……22
③土坑03……22
④土坑04……22
⑤土坑05……23
⑥土坑07……23
(3)　建物址
①１号建物址……24
②２号建物址……24
③３号建物址……24
④５号建物址……24
(4)　溝址
①溝址05……24
②溝址06……26
③溝址07……26
(5)　氾濫原……26
(6)　遺構外出土遺物……26

第４章　まとめ
第１節　遺跡の立地……39
第２節　各時代の概要
(1)　縄文時代……39
(2)　弥生時代……40
(3)　古墳時代……40
(4)　奈良・平安時代以降……40
引用・参考文献……41
報告書抄録

挿図目次

挿図１　試掘トレンチ及び調査位置図……3
挿図２　調査遺跡位置図……8
挿図３　調査位置及び周辺遺跡地図……10
挿図４　基準メッシュ図区画調査位置……13
挿図５　基本層序……14

挿図６　遺構分布図……15
挿図７　ＳＢ04……16
挿図８　ＳＢ05・06……17
挿図９　ＳＢ07・08・09・12……19
挿図10　ＳＢ16・17・19・10・18……21
挿図11　ＳＸ01……22
挿図12　ＳＫ……23
挿図13　ＳＴ……25
挿図14　ＳＤ……27
挿図15　氾濫原……28
挿図16　周辺ピット図①……29
挿図17　周辺ピット図②……30
挿図18　周辺ピット図③……31
挿図19　出土遺物……32
挿図20　出土遺物……33
挿図21　出土遺物……34
挿図22　出土遺物……35
挿図23　出土遺物……36
挿図24　出土遺物……37
挿図25　出土遺物……38

写真図版

図版１　遺跡遠景・調査前風景……43
図版２　調査区全景……44
図版３　調査区全景……45
図版４　調査区全景・ＳＢ04……46
図版５　ＳＢ05・06……47
図版６　ＳＢ07・08……48
図版７　ＳＢ09・12・16……49
図版８　ＳＢ17・19……50
図版９　ＳＢ10・18・ＳＸ01……51
図版10　ＳＫ01・02・03……52
図版11　ＳＫ04・05・07……53
図版12　ＳＴ01・02・05……54
図版13　ＳＴ03・ＳＤ05・06・07……55
図版14　氾濫原・重機作業風景……56
図版15　基準点設置作業・作業風景……57
図版16　整理作業風景・委託写真撮影……58
図版17　ＳＢ05・06出土遺物……60
図版19　ＳＢ08・ＳＫ04・氾濫原出土遺物……61
図版20　遺跡出土　弥生土器……62
図版21　遺跡出土　石器……63

第1章　経　　過

第１節　調査に至るまでの経過

平成13年５月28日付で埋蔵文化財包蔵地ママ下遺跡内における土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出が提出された。事業計画は飯田市上郷飯沼1399－１他において店舗建設および造成工事を行うものであった。当遺跡は平成10年度宅地造成に先立つ試掘調査で古墳時代後期・平安時代の住居址等が確認されており大規模集落の存在、あるいは隣接する堂垣外遺跡同様、古代伊那郡衙との関連遺構の存在も予想された。こうした埋蔵文化財の状況である為工事に先立ち試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議を行うこととした。

よって、平成13年６月12日から25日にかけ、開発対象地区内全域にわたり試掘調査を実施した。

(1) 試掘調査の結果　（挿図１）

①Ａトレンチ（調査面積　66.4㎡）

現地表面より約60～130㎝下の黄褐色砂土・黒褐色砂土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

②Ｂトレンチ（調査面積　47.5㎡）

現地表面より約70～80㎝下の黄褐色砂礫土・黒褐色砂礫土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

③Ｃトレンチ（調査面積　47.5㎡）

現地表面より約80㎝下の黄褐色砂土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

④Ｄトレンチ（調査面積　7.1㎡）

現地表面より約110㎝下の褐灰砂土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

⑤Ｅトレンチ（調査面積　9.1㎡）

現地表面より約120㎝下の褐灰砂土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

⑥Ｆトレンチ（調査面積　8.5㎡）

現地表面より約100㎝下の橙色粘質土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

⑦Ｇトレンチ（調査面積　49.1㎡）

現地表面より約50㎝下の橙色砂礫土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

⑧Hトレンチ（調査面積　73.6㎡）

現地表面より約110㎝下の暗褐色砂礫土層まで調査を行う。トレンチ東側で平安時代と思われる竪穴住居址３軒及び該期遺物を検出。

⑨Iトレンチ（調査面積　24.1㎡）

現地表面より約70㎝下の暗褐色砂礫土層まで調査を行う。具体的な遺構は確認できなかったが、30～70㎝下で遺物包含層（古墳～平安時代）を確認した。

⑩Jトレンチ（調査面積　86.8㎡）

現地表面より約60～70㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。トレンチ東側で古墳時代と思われる竪穴住居址1軒及び該期遺物を検出。

⑪Kトレンチ（調査面積　91.6㎡）

現地表面より約60㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。トレンチ東側で時期不明竪穴住居址１軒及び遺物を検出。

⑫Lトレンチ（調査面積　80.3㎡）

現地表面より約60㎝下の暗褐色砂土層まで調査を行う。トレンチ北側で古墳時代と思われる竪穴住居址２軒、弥生時代と思われる竪穴住居址１軒及び該期遺物を検出。

⑬Mトレンチ（調査面積　43.4㎡）

現地表面より約60㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。トレンチ北側で古墳時代と思われる竪穴住居址２軒及び該期遺物を検出。

⑭Nトレンチ（調査面積　40.3㎡）

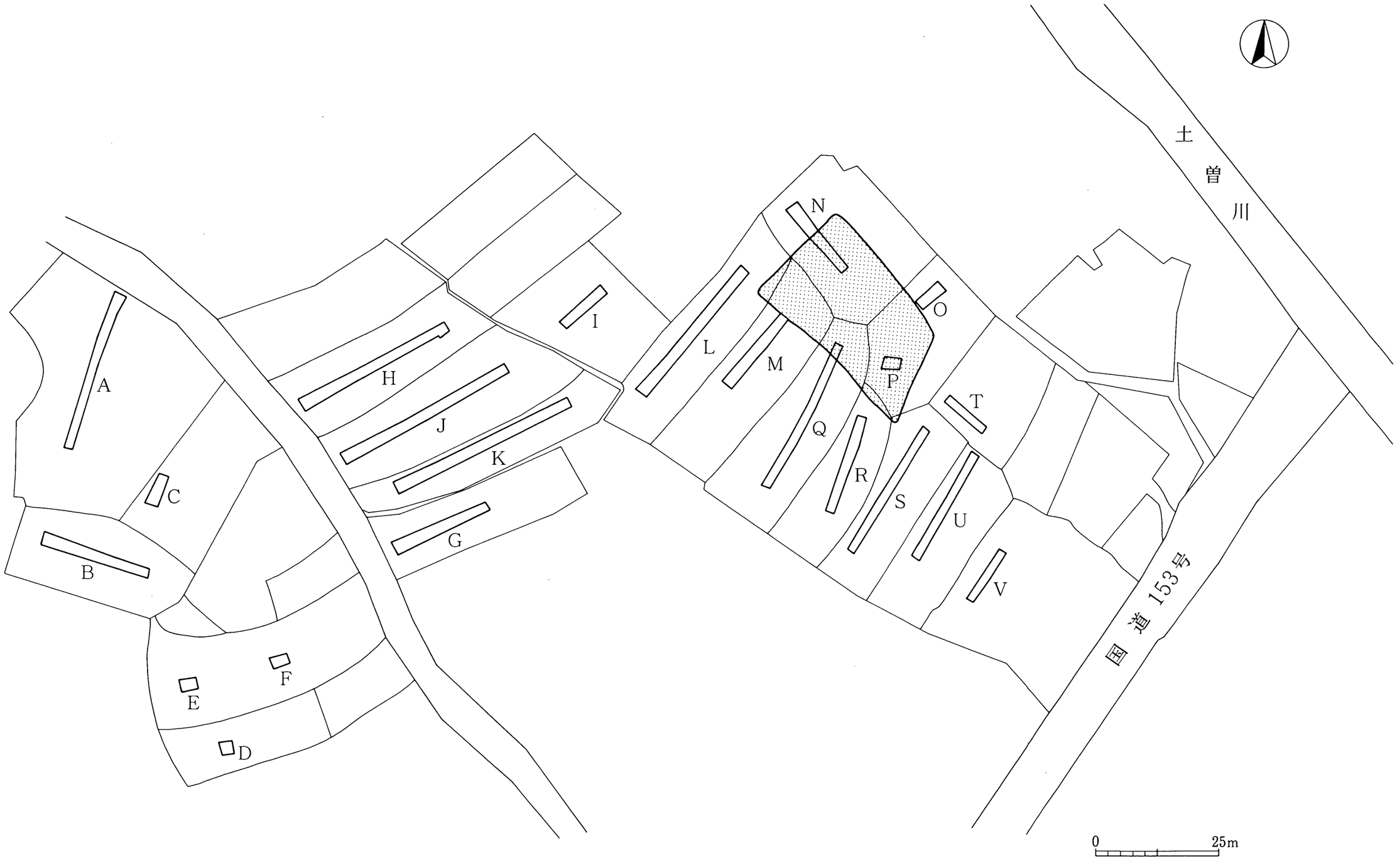
現地表面より約110～120㎝下の褐色砂礫土層まで調査を行う。遺物は確認されたが遺構は不明である。

⑮Oトレンチ（調査面積　14.9㎡）

現地表面より約70㎝下の褐色砂礫土層まで調査を行う。遺構・遺物は確認されなかった。

⑯Pトレンチ（調査面積　8.3㎡）

現地表面より約40㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。遺物は確認されるが遺構は不明である。



挿図１　試堀トレンチ及び調査位置図

⑰Ｑトレンチ（調査面積　61.1㎡）

現地表面より約50～70㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。古墳時代と思われる竪穴住居址２軒、掘立柱建物址及び該期遺物を検出。

⑱Ｒトレンチ（調査面積　41.4㎡）

現地表面より約20～30㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。掘立柱建物址及び土坑を検出。

⑲Ｓトレンチ（調査面積　53.2㎡）

現地表面より約40㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。掘立柱建物址及び土坑を検出。

⑳Ｔトレンチ（調査面積　17.3㎡）

現地表面より約90～100㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。掘立柱建物址、土坑を検出。

㉑Ｕトレンチ（調査面積　43.7㎡）

現地表面より約50～60㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。掘立柱建物址、土坑を検出。

㉒Ｖトレンチ（調査面積　19.6㎡）

現地表面より約50～60㎝下の明褐色砂土層まで調査を行う。全体的に造成を受けており遺構・遺物は確認されなかった。

試掘結果から建設予定地の西端部は湿地が広がること、また中心部一帯に遺構が広い範囲で分布していることが判明した。この調査結果に基づき平成13年11月12日、開発側・飯田市教育委員会の二者で再度保護協議を行った。その結果、駐車場建設部分については盛土等により埋蔵文化財を保護する工法を依頼することとし、建物建設部分については本調査を実施することとした。

保護協議の結果を受け、平成13年11月19日、株式会社ダイナム代表取締役佐藤公平と飯田市長田中秀典との間で飯田市上郷地区における埋蔵文化財保護に関する協定書及び平成13年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。

第２節　調査の経過

諸協議に基づき、11月19日より本発掘調査に着手した。まず、重機による表土剥ぎを20日まで行い、続いて21日に委託による基準点設置、翌22日より作業員による遺構検出作業を行った。検出作業の結果南西側半分は集落域、北東側半分は土曽川氾濫原と判断された。よって、集落域における各遺構の調査、氾濫原の堆積状態の把握に調査の重点を置いた。その後順次遺構を掘り下げ、実測、遺物出土状況写真・個別遺構写真・全景写真および作業風景の撮影を行い、現地での調査作業を平成14年１月10日終了した。そして、15日より重機による現場埋め戻し作業を行い、１月17日に全作業を終了した。引き続き飯田市

考古資料館において現地で記録された図面・写真類の基礎的整理作業を３月末まで行った。

翌平成14年度に出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業・第２原図の作成・トレース・版組等を行い、発掘調査報告書を刊行した。

(1) 調査日誌

平成13年11月12日(月)	事業者側との現地協議
11月19日(月)～20日(火)	重機による表土剥ぎ作業
11月21日(水)	杭打ち作業
11月22日(木)	作業員による調査開始　テント設営等　荒土除去
11月23日(金)	遺構検出作業
11月26日(月)	遺構検出作業　近代暗渠掘下げ
11月27日(火)	ＳＢ04・05掘下げ
11月28日(水)	ＳＢ06掘下げ　ＳＢ05写真撮影
11月29日(木)	ＳＢ04写真撮影　床下ピット掘下げ
11月30日(金)	昨夜の雨で調査区内に溜まった水を水中ポンプで汲み上げる
12月３日(月)	ＳＢ06遺物出土状況写真撮影　取り上げ
12月４日(火)	雨の為現場休み
12月５日(水)	ＳＢ09・12掘下げ　調査区西側基本層序調査
12月６日(木)	雨の為現場休み
12月７日(金)	ＳＢ06実測・写真撮影　ＳＢ09遺物実測
12月10日(月)	ＳＢ07・16掘下げ　ＳＢ12写真撮影
12月11日(火)	ＳＢ07・09・12掘下げ終了
12月12日(水)	調査区南側再検出　ＳＢ07・09・16・ＳＴ02写真撮影
12月13日(木)	雨の為現場休み
12月14日(金)	ＳＢ08掘下げ　ＳＸ01写真撮影
12月17日(月)	ＳＢ13～15設定取り消し　ＳＴ05検出　ＳＤ05・06掘下げ
12月18日(火)	ＳＴ01・ＳＢ10写真撮影
12月19日(水)	ＳＤ06掘下げ
12月20日(木)	ＳＢ19写真撮影
12月21日(金)	雪の為現場休み
12月25日(火)	調査区北側（氾濫原）へトレンチ設定
12月26日(水)	ＳＢ18・ＳＤ06掘下げ終了　ＳＢ17実測・写真撮影
12月27日(木)	平成13年の現地作業最終日
12月28日(金)～平成14年１月７日(月)	作業員年末休業
平成14年１月８日(火)	平成14年現地作業開始

1月9日(水)	遺構調査終了　調査区全景写真撮影
1月10日(木)	テント等調査機材片付け　　現地における発掘調査終了
1月15日(火)～17日(水)	調査区埋め戻し作業

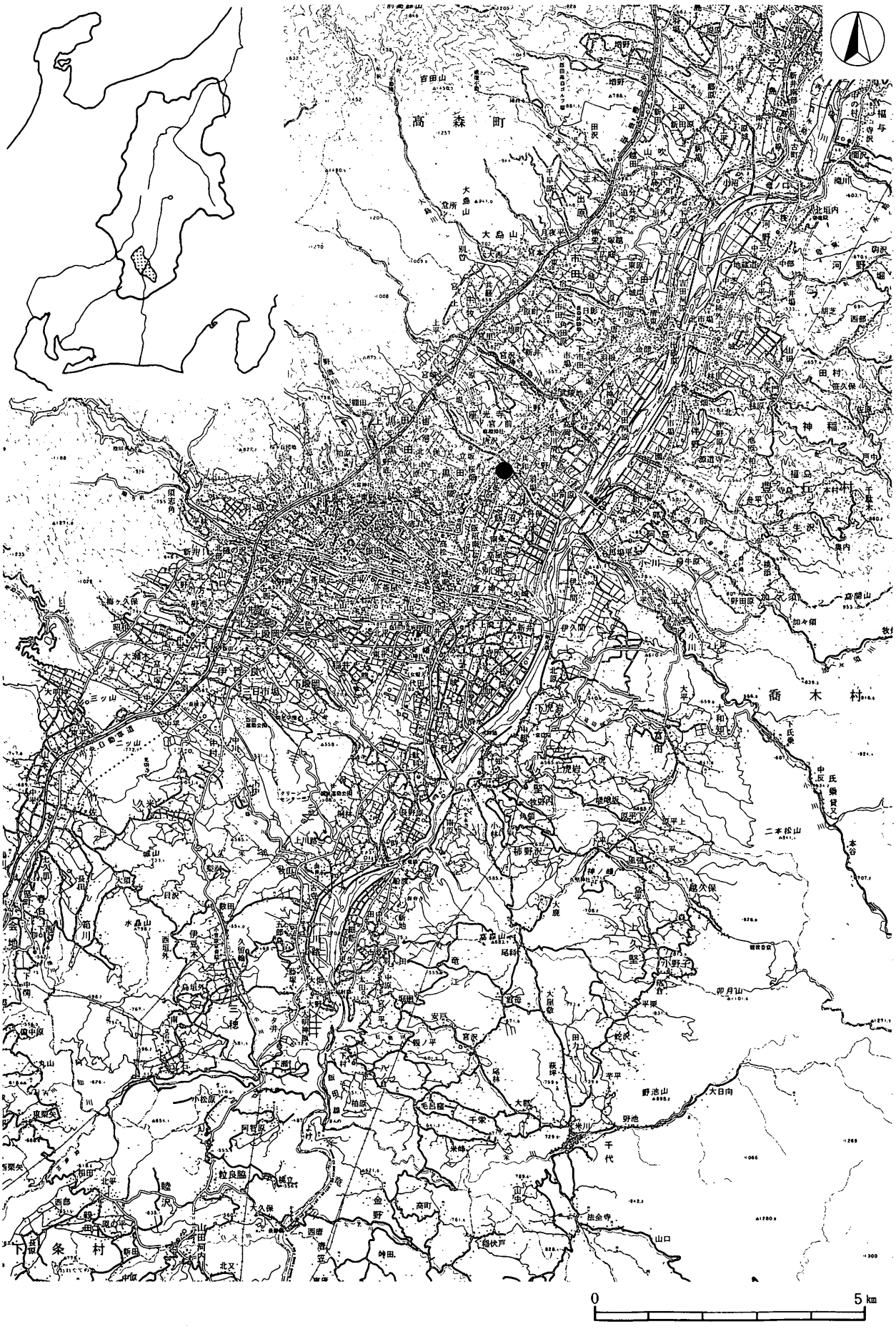
第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会　教育長　冨田　恭啓				
調査担当者	坂井　勇雄	羽生　俊郎	下平　博行		
調　査　員	佐々木嘉和	馬場　保之	澁谷恵美子	吉川　金利	伊藤　尚志
作　業　員	新井ゆり子	池田　幸子	伊藤　孝人	伊東　裕子	太田　沢男
	岡田　直人	金井　照子	唐沢古千代	北原　　祐	木下　早苗
	木下　玲子	熊崎三代吉	小島　康夫	小平まなみ	小林　千枝
	斎藤　徳子	佐々木一平	佐々木真奈美	佐藤知代子	杉山　春樹
	関島真由美	瀬古　郁保	高木　純子	竹本　常子	橘　千賀子
	田中　　薫	筒井千恵子	中沢　温子	中田　　恵	中平けい子
	中村地香子	服部　光男	林　勢紀子	林　ひとみ	原　　昭子
	樋本　宣子	平栗　陽子	福沢　育子	福沢トシ子	古林登志子
	牧内喜久子	牧内　八代	松下　省三	松下　成司	松下　博子
	松本　恭子	三浦　厚子	三浦　照夫	宮内真理子	森藤美知子
	森山　律子	柳沢　謙二	吉川　悦子	吉川紀美子	

(2) 事務局

飯田市教育委員会	教育次長		久保田裕久		
	生涯学習課	課長	中島　　修		
	文化財保護係	係長	小林　正春		
	文化財保護係		馬場　保之	澁谷恵美子	吉川　金利
			下平　博行（～平成13年度）		伊藤　尚志
			坂井　勇雄	羽生　俊郎（平成13年度～）	
	学校教育課	総務係	宮田　和久	福沢　恵子（～平成13年度）	



挿図２　調査遺跡位置図

第2章　遺跡の環境

第１節　自然環境

当遺跡の存在する飯田市上郷飯沼は、長野県南部を南北に走る木曽山脈と、赤石山脈の西側を並走する伊那山脈との間に広がる伊那盆地南端にあり、その中央部を天竜川が南流する。この天竜川とその支流により形成された西側段丘面上に上郷飯沼は存在する。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰層を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの５段階に編年されている。

上郷地区の地形の特徴として、地区の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌面の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼称される沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の比高は約50mを測る。前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。

上段の中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海抜398mとの比高差200～80mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底川による新期扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。この中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南西側に中位段丘下殿岡面、北東側に中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域が低位段丘Ⅰ伊久間面である。

下段の低位段丘Ⅱはさらに南条面・別府面・飯沼面と細分される。南条面は現在の天竜川の河床に続く最低位の沖積段丘で、標高398～408mの間にあり、現河床との比高は２～３mである。別府面は南条面の一段上に位置する段丘で、標高408～418mに位置し、その比高差は約2mである。

ママ下遺跡は飯田市上郷飯沼地籍に所在し、地質的には低位段丘Ⅱ飯沼面にあたる。標高418～440mであり、別府面との標高差は２～３m、天竜川との比高差は20～40mを測る。この段丘の堆積物は礫が多く一部に砂や粘土層もみられ、また湧水も豊富であり典型的な水田地帯となっている。

第２節　歴史環境

上郷地区の遺跡を概観すると、天竜川・野底川の氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代　図版』を編纂するのに先立ち、市村咸人氏と郡下を探訪してから特に知られるようになった。戦後は市村・大澤和夫両氏を中心に『下伊那史』第二・三巻、『信濃史料』第一巻、『全国遺跡地図　長野県版』を刊行する過程で、上郷地区内の遺跡や古墳を明確にしてきた。昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興氏が『上郷史』で、また岡田正彦氏が『長野県史　考古資料編』で遺跡分布図一覧表の作成にあたった。昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり遺跡詳細分布調査を実施し、平成５年度に飯田市との合併後、平成７年度に飯田市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査が行われている。

上郷地区の遺跡を概観すると、その大半が複合遺跡であるが、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡や黒田大明神原遺跡出土の表裏縄文土器と、黒田柏原遺跡（柏原Ａ遺跡）出土の石器剥片、宮垣外遺跡出土の有舌尖頭器などにより、縄文時代草創

挿図3　調査位置及び周辺遺跡地図

期からその黎明を知ることができる。縄文時代早期になると、比較的山麓部に位置する八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器・繊維を含む条痕文土器・撚糸文土器が出土しており、黒田大明神原・西浦遺跡の発掘調査において該期の住居址が確認されている。

縄文時代前期の遺跡は、姫宮・日影林・高松原・黒田大明神原遺跡などがある。以前は、遺跡の分布域は野底山系の山麓部から低位段丘Ⅰにあり、下段の飯沼・別府地籍から発見されず、沖積地帯への進出はなかったと考えられてきた。しかし、昭和62年度に実施された矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が確認されたことで、段丘地形の大半に人々の営みのあったことが窺える。

縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱの南条面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認されており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。これまで調査された主なものとしては黒田大明神原・平畑・増田・垣外・丹保遺跡などがあげられる。

縄文時代後•晩期になると遺跡は極端に減少し、特に後期では上段を中心として日影林遺跡でまとまった資料が得られているが、晩期については矢崎遺跡に当該資料がある他は詳細不明である。

弥生時代は、稲作を主体とする文化であり、飯田・下伊那地方へは東海地方から東漸したものと考えられる。その始まりの時期として、矢崎遺跡から出土した条痕文土器は文化の波及を考える上で貴重な資料といえる。稲作が定着する中期になると、丹保・堂垣外遺跡など下段地帯に遺跡が拡大する。南条面に立地する飯沼棚田遺跡では、弥生時代の水田址が発見されている。該期の遺跡の大半は、低位段丘Ⅱの飯沼・別府地籍に集中することから、この一帯に見られる湿地帯を利用しての稲作が類推される。

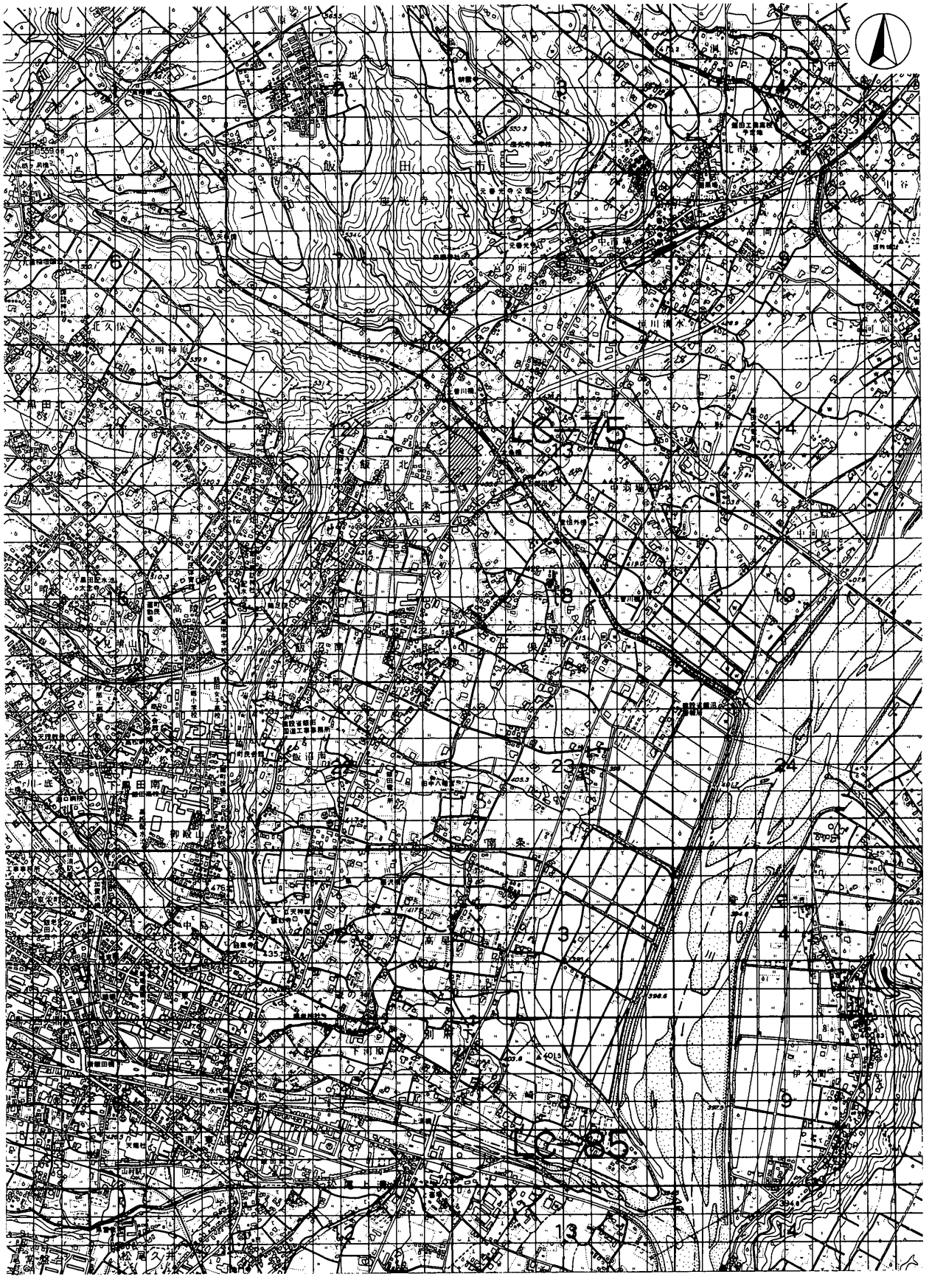
弥生時代後期になると、低位段丘面上の遺跡はより発達し、さらに高位段丘面まで遺跡が拡大し、水田による稲作ばかりでなく、雑穀類の畑作も作業の一翼を担ったと考えられる。調査された遺跡も多く、上段の高松原・垣外・原の城遺跡、下段の丹保・兼田遺跡などがある。なかでも、丹保遺跡は後期全般にわたる拠点集落の一つといえる。

古墳時代においては、上郷地区の古墳は現在のところ消滅した古墳を含めて35基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。中でも、県史跡に指定されている飯沼天神塚古墳は、全長74.5mの伊那谷最大級の前方後円墳として知られており、細長い羨道部を特徴とする横穴式石室を有する。また、飯沼天神塚古墳の南東約180mに位置する溝口の塚古墳が平成8・9年度に発掘調査され、竪穴式石室を有する墳丘長約50mの二重周溝を持つ前方後円墳であることが確認された。この結果5世紀後半から6世紀にかけての上郷地区の首長墓系列を追うことができ、当地区の重要性も再認識されることとなった。集落そのものの調査例は少なく、実態は不明であるが、低位段丘においては段丘端部を墓域とし、豊かな経済基盤の想定される下段の地域を中心に展開していたものと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は60数ヵ所を数え、ほぼ地区内全域に分布する。特に、低位段丘Ⅱに位置する堂垣外遺跡は古墳時代から平安時代までの集落であるが、遺物・遺構から伊那郡衙との強い結びつきが考えられる。また矢崎遺跡では、平安時代の住居址が確認されるとともに、大規模な鍛冶遺構と大量のフイゴ羽口や鉄滓が検出され、その役割が注目されている。この低位段丘Ⅱ一帯は、古代伊那郡衙址である座光寺地区の恒川遺跡群と同一段丘面にあたり、古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測され、古代史研究上注目すべき地域であるといえる。また、海抜410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地である。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』などの文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末には近衛家の郡戸庄であった。

このように、低位段丘Ⅱの一帯は、上郷地区でも密に遺跡が立地する箇所といえ、縄文時代以降、生産域をひかえた生活域として、あるいは墓域として連続して人間の足跡を追うことができる。

ママ下遺跡は、以前から土師器・須恵器等が散布する遺跡として知られていた。平成10年度の宅地造成に先立つ試掘調査でも古墳～平安時代の住居址が検出され、集落の存在が予測される地域であった。今回、試掘調査・本調査を通じてこの予想を裏付ける古墳～平安時代にわたる集落の存在が明らかになった。また、隣接する土曽川の旧氾濫原も確認され、集落を取り巻く厳しい自然環境の様相も明確になったといえる。



挿図４　基準メッシュ図区画調査位置

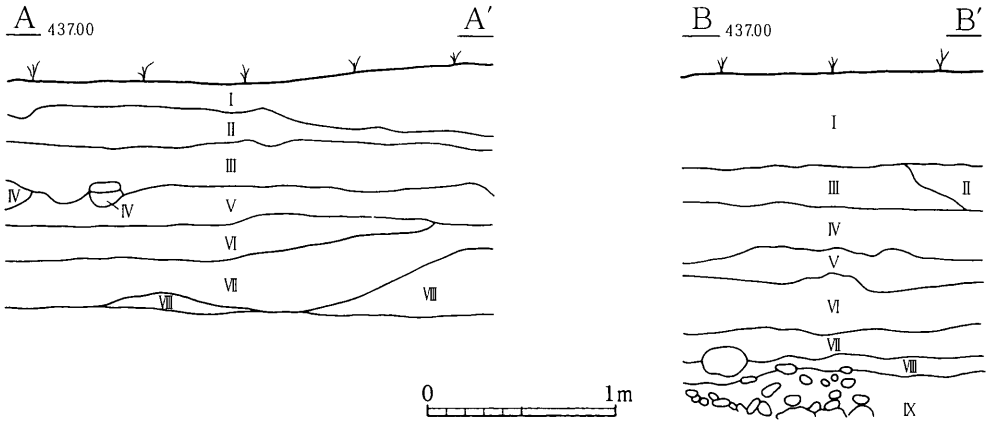
第3章　調査結果

第１節　調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託した。(設定方法は、飯田市教育委員会　1988 『美女遺跡』参照)

今次調査区はＬＣ75　13－25・33に位置する。(挿図４)。

第２節　基本層序



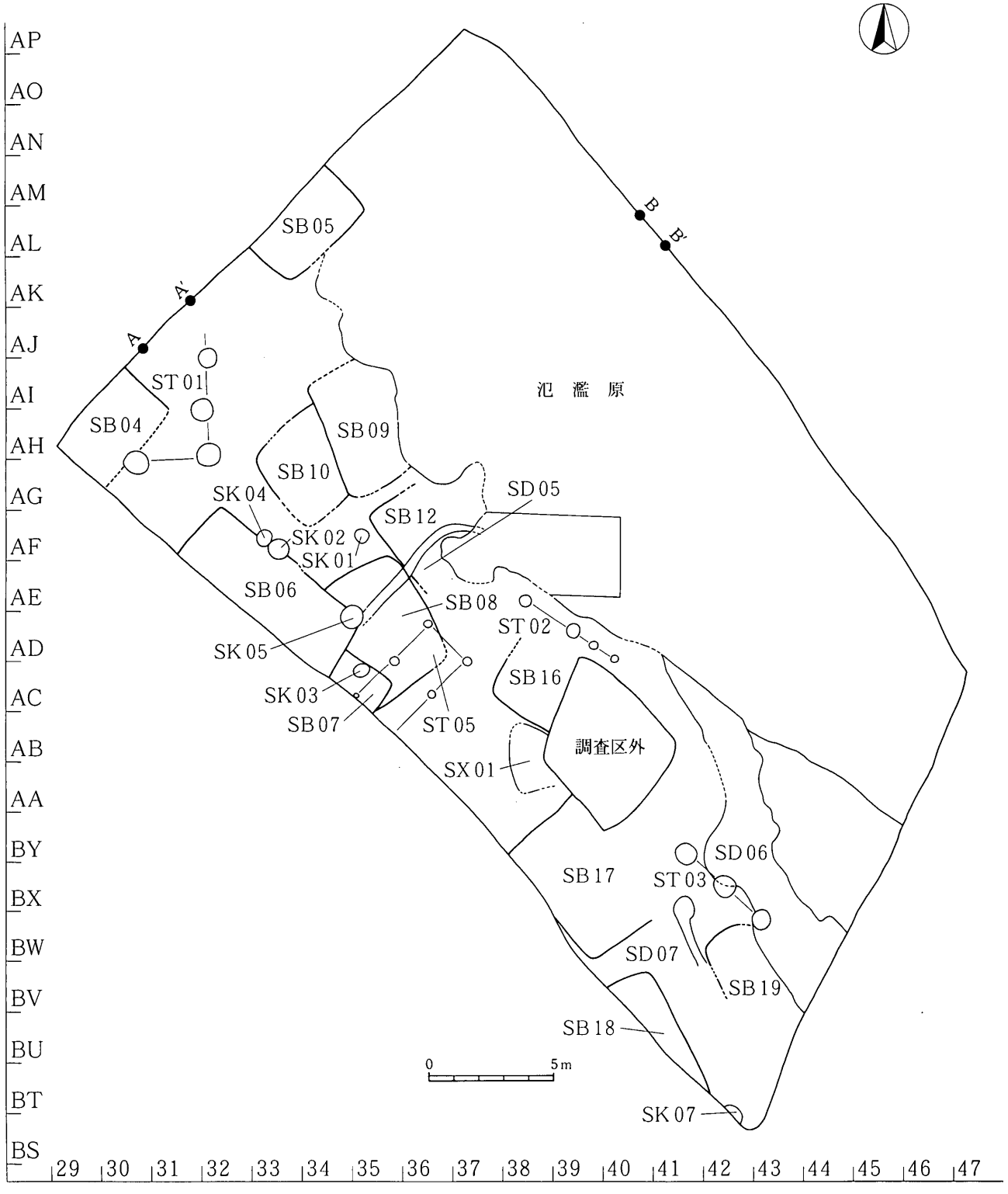
挿図５　基本層序

Aセクション土層表

層位	土　色		土性	しまり	粘性	備　考
Ⅰ						耕土
Ⅱ	10YR　5/1	褐灰	sc	強	弱	
Ⅲ	10YR　3/1	黒褐	sc	強	弱	1cm大の小礫含む （住居址(時期不明)床面確認）
Ⅳ						ピット埋土
Ⅴ	5Y　6/2	オリーブ黄	s	強	無	4cm大の礫　最下部に鉄分沈殿 （上面遺構検出面）
Ⅵ	10YR　5/4	にぶい黄褐	s	強	無	
Ⅶ	10YR　4/3	にぶい黄褐	sc	強	無	
Ⅷ	10YR　5/6	黄褐	s	強	無	

Bセクション土層表

層位	土　色		土性	しまり	粘性	備　考
Ⅰ						耕土
Ⅱ	5Y　5/3	灰オリーブ	sc	強	弱	
Ⅲ	10YR　5/2	灰黄褐	sc	強	弱	
Ⅳ	10YR　4/1	褐灰	sc	強	弱	
Ⅴ	10YR　7/1	灰白	s	無	無	粗砂
Ⅵ	10YR　4/1	褐灰	sLc	無	弱	細砂
Ⅶ	10YR　6/2	灰黄褐	s	強	無	5mm前後の礫を多く含む　酸化鉄多く含む
Ⅷ	10YR　3/1	黒褐	sc	無	弱	
Ⅸ	2.5YR　4/6	赤褐	s	無	無	粗砂　拳大～直径70cm前後の亜角礫を多く含む


AP
AO
AN
AM
AL
AK
AJ
AI
AH
AG
AF
AE
AD
AC
AB
AA
BY
BX
BW
BV
BU
BT
BS
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
A
A'
B
B'
SB05
ST01
SB04
SB09
SB10
氾 濫 原
SK04
SK02
SK01
SD05
SB12
SB06
SB08
ST02
SK05
SB16
SK03
SB07
ST05
調査区外
SX01
SD06
SB17
ST03
SD07
SB19
SB18
0
5m
SK07

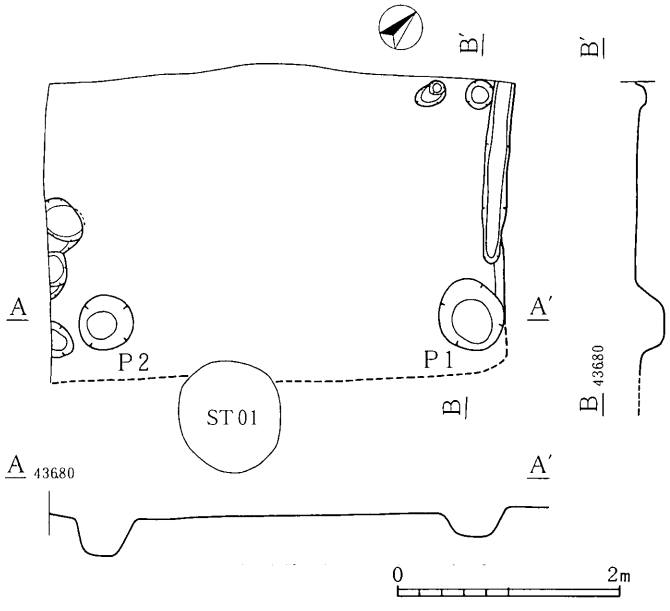
挿図6　遺構分布図

第３節　遺構・遺物

(1) 住居址

①４号住居址（ＳＢ04）（挿図７）

遺構　調査区北西側隅、ＡＨ30を中心に検出した。西側が調査区外の為全体の３分の１を調査した。ＳＴ01に切られていると思われるが、検出プランが不明確な為その規模、主軸方位等は不明である。残存範囲から方形を呈していると推定される。北側部分で一部壁面が見られ、検出面から床面までの高さは４㎝を測る。床面からの立ち上がりはほぼ垂直である。床面は貼床が残っていないが、北側壁際で周溝の一部と思われる落ち込みが確認された。東側で主柱穴と思われるピット（Ｐ１・Ｐ２）が２箇所見られるがその他の施設は不明である。



挿図７　SB04

遺物（挿図19）　土師器甕、須恵器杯などが出土しているが、覆土中よりの破片が主であり全体的に遺物量は少ない。

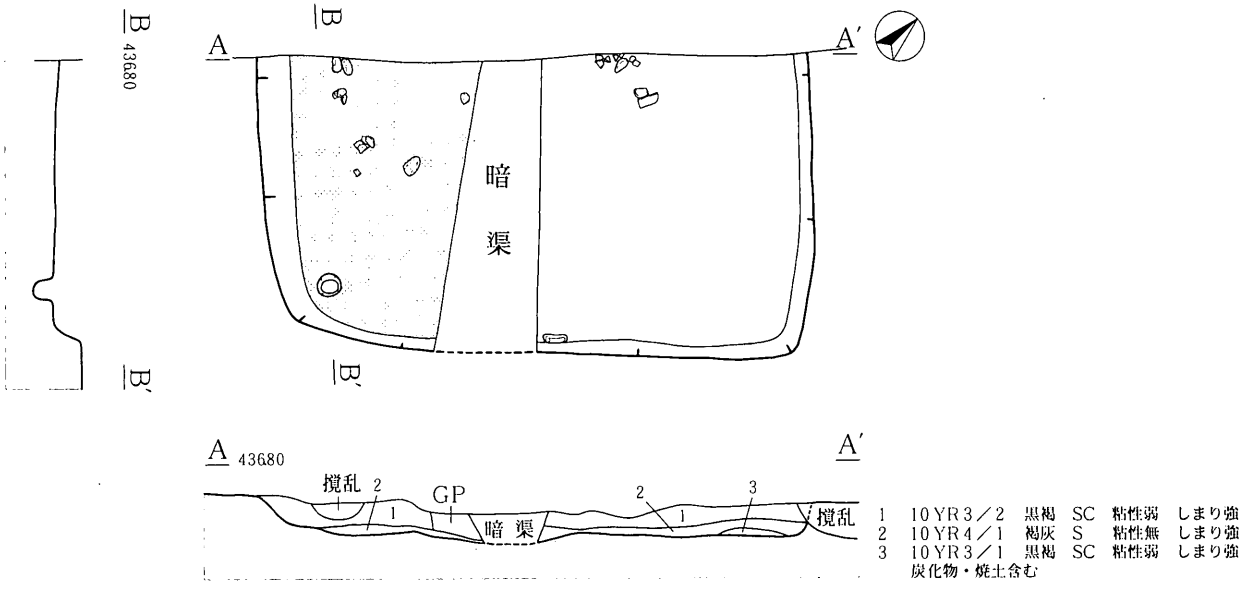
時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

②５号住居址（ＳＢ05）（挿図８）

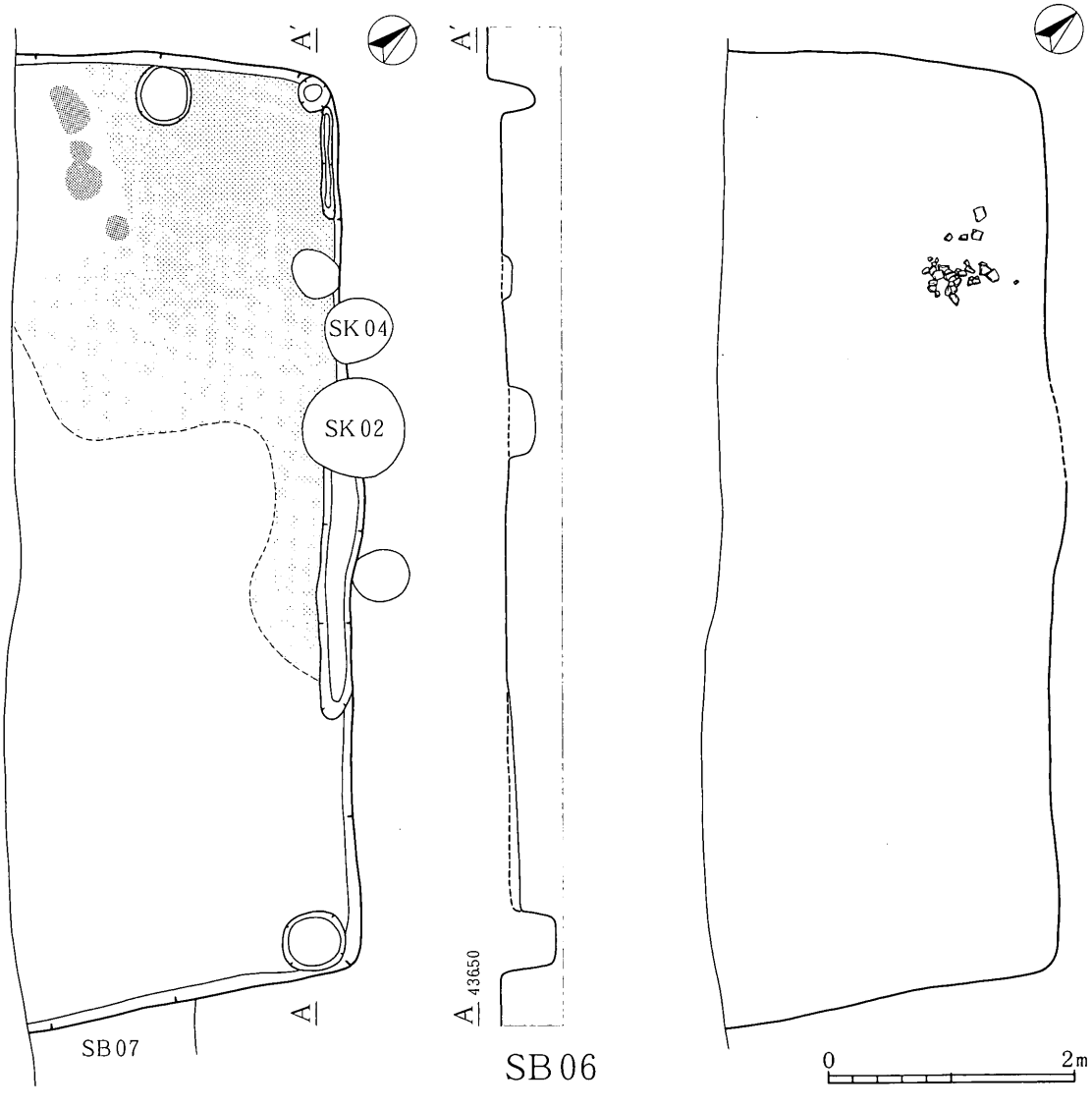
遺構　調査区北側、ＡＬ33を中心に検出した。北側が調査区外の為全体の２分の１を調査した。中央部を近代の暗渠によって壊され、東側半分は氾濫原の影響を受けている為平面プランが明確ではないが、残存範囲から方形を呈していると推定される。南西側は比較的残存しており、壁や床面を確認した。検出面から床面までの高さは約16㎝で、床面からの立ち上がりはややゆるやかである。床面は軟弱であるが貼床があり、焼土等がまばらに確認された。南隅でピットが１箇所確認されたがその他の住居址内施設は不明である。

遺物（挿図19）　長胴甕、高杯などが出土しているが、高杯はやや古相を示しており氾濫原による混入遺物の可能性が考えられる。

時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。



SB05



SB06

挿図8　SB05・06

③6号住居址（SB06）（挿図8）

遺構　調査区南壁際、AE33を中心に検出した。南西側が調査区外の為全体の2分の1を調査した。SB07・08・SD05を切り、SK02・04・05に切られる。平面プランは長方形を呈しており、主軸方位はN50°Wを示す。主軸方向の一辺が7.9mを測り、比較的大型の住居址である。壁面はほぼ垂直の立ち上がりを見せ、検出面から床面までの高さは15cmをはかる。床面は北側で貼床が一部確認されたが、全体的に軟弱である。周溝は北東側で一部確認された。カマドは北西側に構築されていたと思われるが残存状況が悪く、床面上の焼土、炭化物、粘土痕及び調査区壁面上でその痕跡を確認したのみである。その他、住居址内でピットが確認されているが柱穴になるか不明である。

遺物（挿図19・20・24）　全体的に遺物量は多く、カマド周辺から長胴甕、土師器杯等が出土している。その他、覆土上層からは混入遺物と思われる長胴甕等が出土している。

時期　重複関係、遺物より古墳時代後期と考えられる。

④7号住居址（SB07）（挿図9）

遺構　調査区南壁際、AC35を中心に検出した。西側でSB06に切られ、南側が調査区外の為全体の4分の1を調査した。北側でSB08を切り、SK03・ST05に切られる。東側でコーナーの一部を確認したが掘方での検出であり、平面プラン、主軸方位等は不明である。東側コーナー付近のピットが主柱穴になる可能性があるが、その他の施設は不明である。

遺物　全体的に遺物量は少なく破片が多い。

時期　重複関係より古墳時代後期と考えられる。

⑤8号住居址（SB08）（挿図9）

遺構　AE35を中心に検出した。西側半分をSB06・07・ST05に切られ、全体の約2分の1を調査した。壁や床面はほとんど削平されており掘方での検出である。残存する貼床等から推定すると平面プランは方形を呈し、主軸方位はN27°Wであると考えられる。北側壁際で一部焼土・炭化物・粘土痕が集中している場所がある事からカマドが存在していたと思われる。

遺物（挿図20）　カマド付近から長胴甕が出土しているが、全体的に遺物量は少ない。

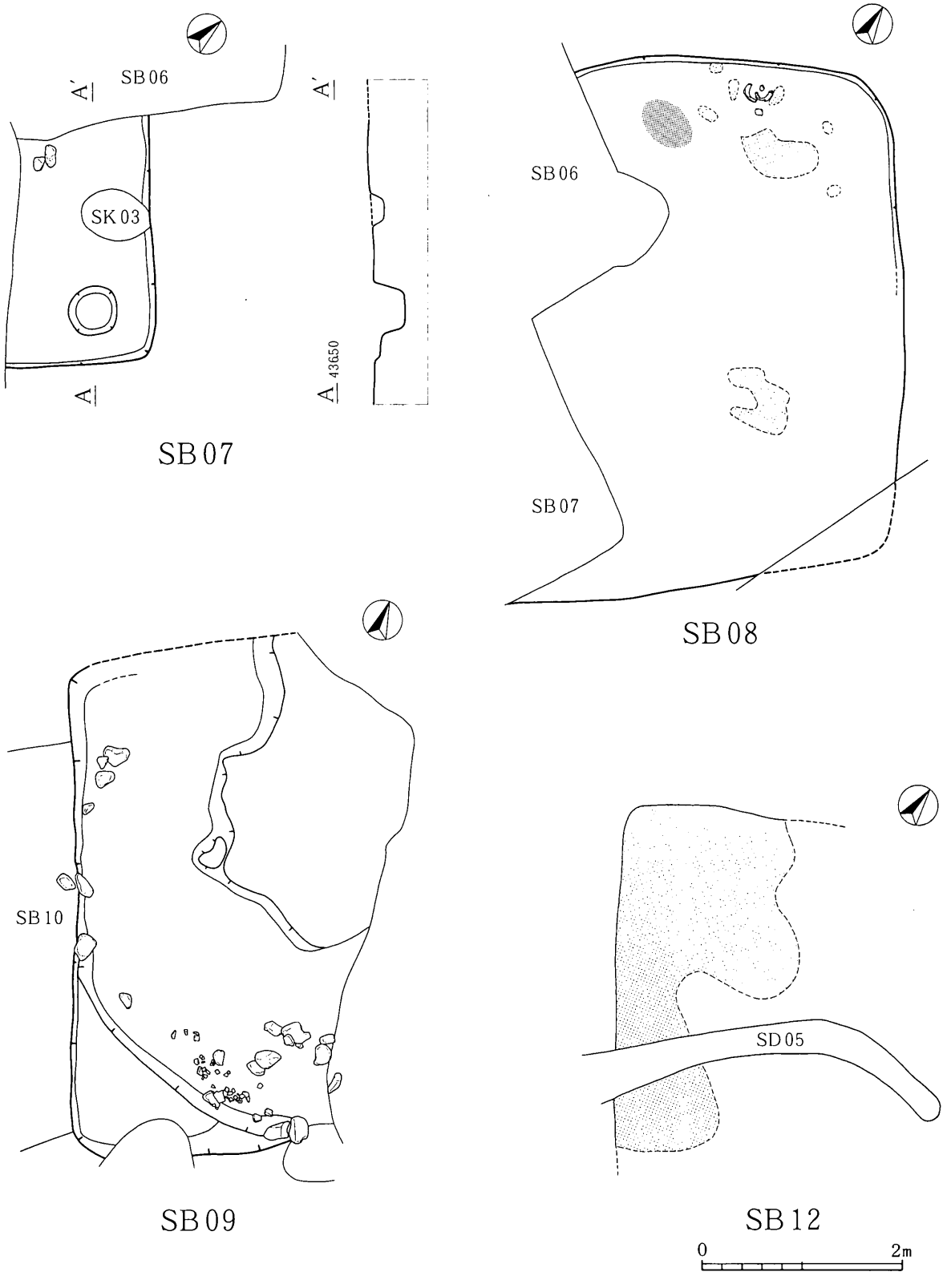
時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

⑥9号住居址（SB09）（挿図9）

遺構　AH35を中心に検出した。東側が氾濫原や近代の暗渠に壊されている為全体の2分の1を調査した。SB10を切る。掘方での検出の為プランは明確でないが、その範囲から一辺5mの方形を呈すると推定され、主軸方位はN29°Wを示す。掘方時の地山が部分的にマウンド状に残存しているが、構築過程のものか自然的なものなのか検討を要する。住居内施設は不明である。

遺物（挿図20）　遺構西側で住居址に伴うと考えられる長胴甕等が出土している。その他須恵器杯、長頸壺、土師器杯をはじめとする比較的多量の遺物片が出土しているが、遺物の時期は様々であり氾濫原による混入遺物と考えられる。

時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。



挿図9　SB07・08・09・12

⑦12号住居址（ＳＢ12）（挿図９）

遺構　ＡＦ36を中心に検出した。住居址のほとんどを氾濫原等により壊されている為全体のプランは不明であるが、西側に僅かに残存する貼床等からコーナーを含むプランの一部を確認した。ＳＤ05に切られる。住居内施設は不明である。

遺物　長胴甕の胴部片等が出土しているが図示できる遺物は無い。遺物量は全体的に少ない。

時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

⑧16号住居址（ＳＢ16）（挿図10）

遺構　ＡＣ38を中心に検出した。北側は削平され、東側は調査区外の為全体のプランは不明であり、南側で掘方によるプランを一部確認したのみである。東側で僅かに貼床を確認したが床面は全体的に不明である。住居内施設は西側コーナー付近で主柱穴の可能性があるピットを確認した。

遺物（挿図21）　須恵器杯等が出土しているが、遺物量は全体的に少ない。

時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

⑨17号住居址（ＳＢ17）（挿図10）

遺構　ＢＹ39を中心に検出した。北側部分で一部床面を確認したがその他は掘方での確認である。平面プランは一辺5.5mの方形を呈すると推測され、主軸方位はＮ42°Ｗを示す。残存する床面は堅固な貼床であり、床面上には焼土と炭化物が広範囲に堆積している状況から焼失家屋である可能性が高い。

遺物（挿図21）　床面残存部上より長胴甕が出土している。全体的に遺物量は少ない。

時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

⑩19号住居址（ＳＢ19）（挿図10）

遺構　ＢＷ42を中心に検出した。西側で貼床の残存によりコーナーを含むプランの一部を検出したが、ほとんどの部分が削平されていた為全体のプランは不明である。西側壁際で周溝の一部と思われる堀込みを確認した。

遺物（挿図21）　小型甕が出土しているが、全体的に遺物量は少ない。

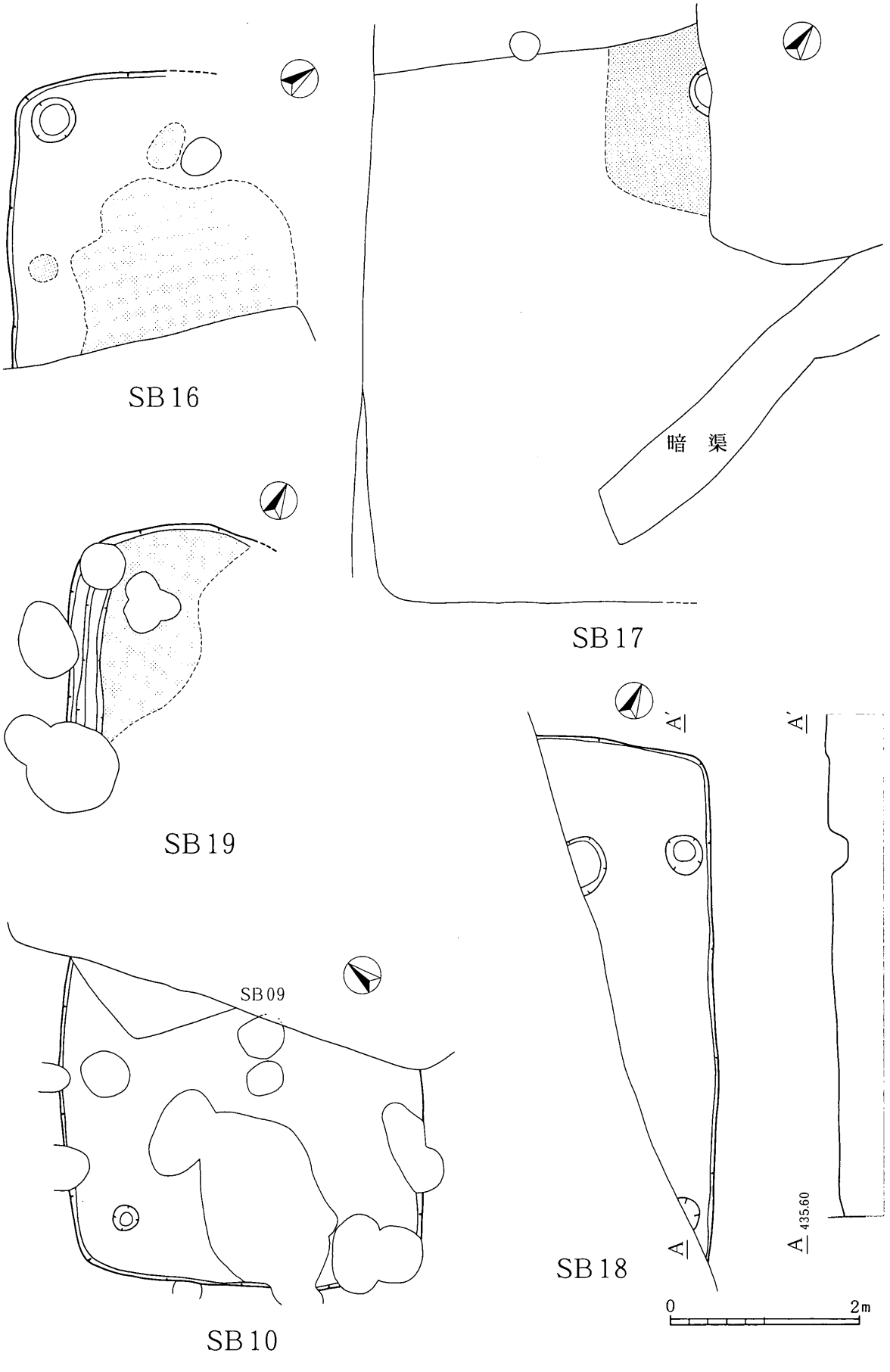
時期　遺物より古墳時代後期と考えられる。

⑪10号住居址（ＳＢ10）（挿図10）

遺構　ＡＧ34を中心に検出した。東側でＳＢ09に切られる為全体の３分の２を調査した。全体的に削平されている為プランが明確ではないが、部分的に残存する床面の範囲から一辺約４ｍの方形を呈すると推定される。住居内施設は不明である。

遺物　全体的に遺物量は少なく、破片が多い。

時期　古墳時代と考えられる。



挿図10　SB16・17・19・10・18

⑫18号住居址（ＳＢ18）（挿図10）

遺構　調査区南側壁際ＢＵ41を中心に検出した。南側は調査区外の為全体の３分の１を調査した。検出プランは明確ではなく、壁面と掘方から長方形を呈すると推定される。主軸方位はN27°Ｗを示す。

遺物　全体的に遺物量は少なく、破片が多い

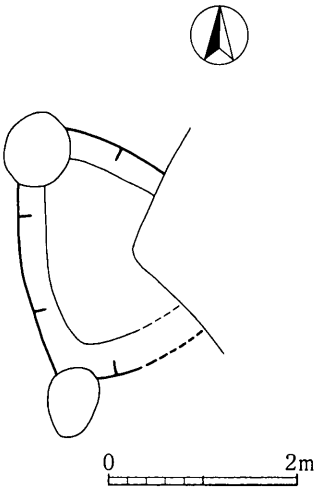
時期　古墳時代と考えられる。

⑬竪穴状遺構（ＳＸ01）（挿図11）

遺構　ＡＢ38を中心に検出した。検出当初住居址と考えられたが平面プランが不定形であり、床面、住居内施設等が確認されなかった為竪穴状遺構とした。長径240cm、短径200cm、深さ20cmを測る。

遺物　（挿図21）　全体的に遺物量は少なく、破片が多い

時期　不明である。



挿図11　ＳＸ01

(2) 土　坑

①土坑01（ＳＫ01）（挿図12）

遺構　ＡＦ35を中心に検出した。長径60cm、短径50cm、深さ30ｃｍを測る。平面形は楕円を呈する。

遺物　土師器などの破片が出土している。

時期　不明である。

②土坑02（ＳＫ02）（挿図12）

遺構　ＡＦ33を中心に検出した。長径85cm、短径80cm、深さ45cmを測る。平面形は円形を呈する。ＳＢ06を切る。

遺物　（挿図21）　甕の底部が出土している。

時期　遺物より９世紀代と考えられる。

③土坑03（ＳＫ03）（挿図12）

遺構　ＡＣ35を中心に検出した。長径68cm、短径50cm、深さ20cmを測る。平面形は楕円を呈する。ＳＢ07を切る。覆土中に大小の礫含む。

遺物　土師器などの破片が出土している。

時期　不明である。

④土坑04（ＳＫ04）（挿図12）

遺構　ＡＦ33を中心に検出した。長径（50）cm、短径42cm、深さ18cmを測る。ＳＢ06を切る。

遺物　（挿図21）　須恵器杯等が出土している。

時期　遺物より９世紀代と考えられる。

⑤土坑05（SK05）（挿図12）

遺構　AD34を中心に検出した。長径95cm、短径88cm、深さ20cmを測る。平面形は円形を呈する。SB06を切る。

遺物　土師器などの破片が出土している。

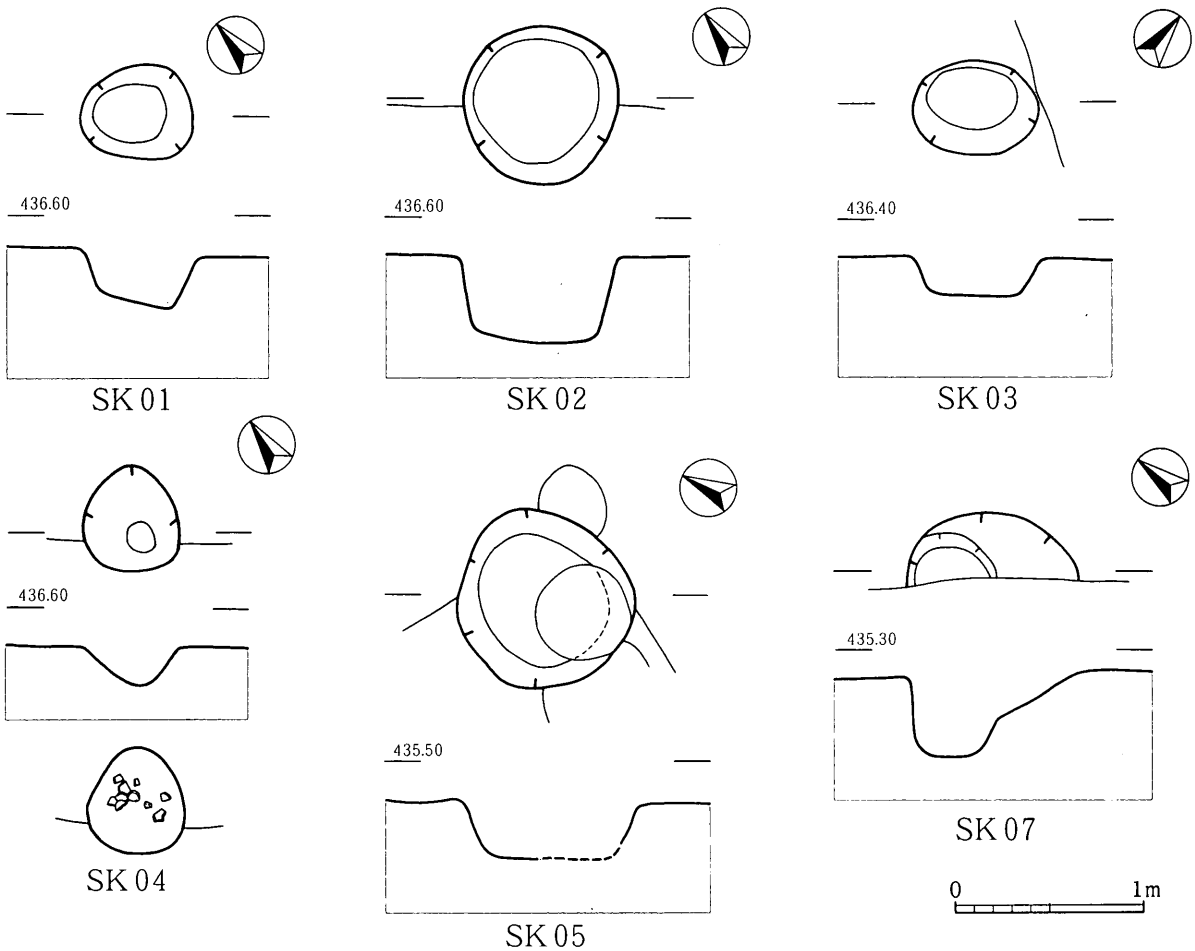
時期　不明である。

⑥土坑07（SK07）（挿図12）

遺構　BS42を中心に検出。西側は調査区外の為全体の２分の１を調査した。長径92cm、短径34cm、深さ40cmを測る。

遺物　土師器などの破片が出土している。

時期　不明である。



挿図12　SK

(3) 建物址

①１号建物址（ＳＴ01）（挿図13）

遺構　ＡＨ31を中心に検出した。検出された規模は桁行２間、梁行１間であるが、調査区外まで広がると考えられる。棟方向は真北を示す。柱穴は柱間寸法が桁行で2.0m、梁行で2.6mを測り、径70～100㎝の円形を呈する。柱穴内部には礫や柱痕の見られるものもある。

遺物　土師器の破片が少量出土している。

時期　形状から古墳時代と考えられる。

②２号建物址（ＳＴ02）（挿図13）

遺構　ＡＤ39を中心に検出した。直径30～50㎝の穴が１～２ｍの間隔で４つ直線的に配置されている。南側に対応する穴は確認されず、北側は氾濫原の範囲に含まれる為不明である。

遺物　土師器の破片が少量出土している。

時期　形状から古墳時代と考えられる。

③３号建物址（ＳＴ03）（挿図13）

遺構　ＢＸ42を中心に検出した。直径80㎝の穴が２ｍ間隔で３つ直線的に配置されている。周辺に対応する穴はなく、規模等不明な点が多い。

遺物　土師器の破片が比較的多く出土している。

時期　形状から古墳時代と考えられる。

④５号建物址（ＳＴ05）（挿図13）

遺構　ＡＣ36を中心に検出した。検出された規模は桁行２間以上、梁行１間であるが、全体の規模は調査区外まで広がると推定される。棟方向はＮ45°Ｅを示す。柱穴は柱間寸法が桁行で２～2.2m、梁行で2.1mを測り、径15～30㎝の比較的小形の円形を呈する。

遺物　遺物は出土していない。

時期　形状から中世と考えられる。

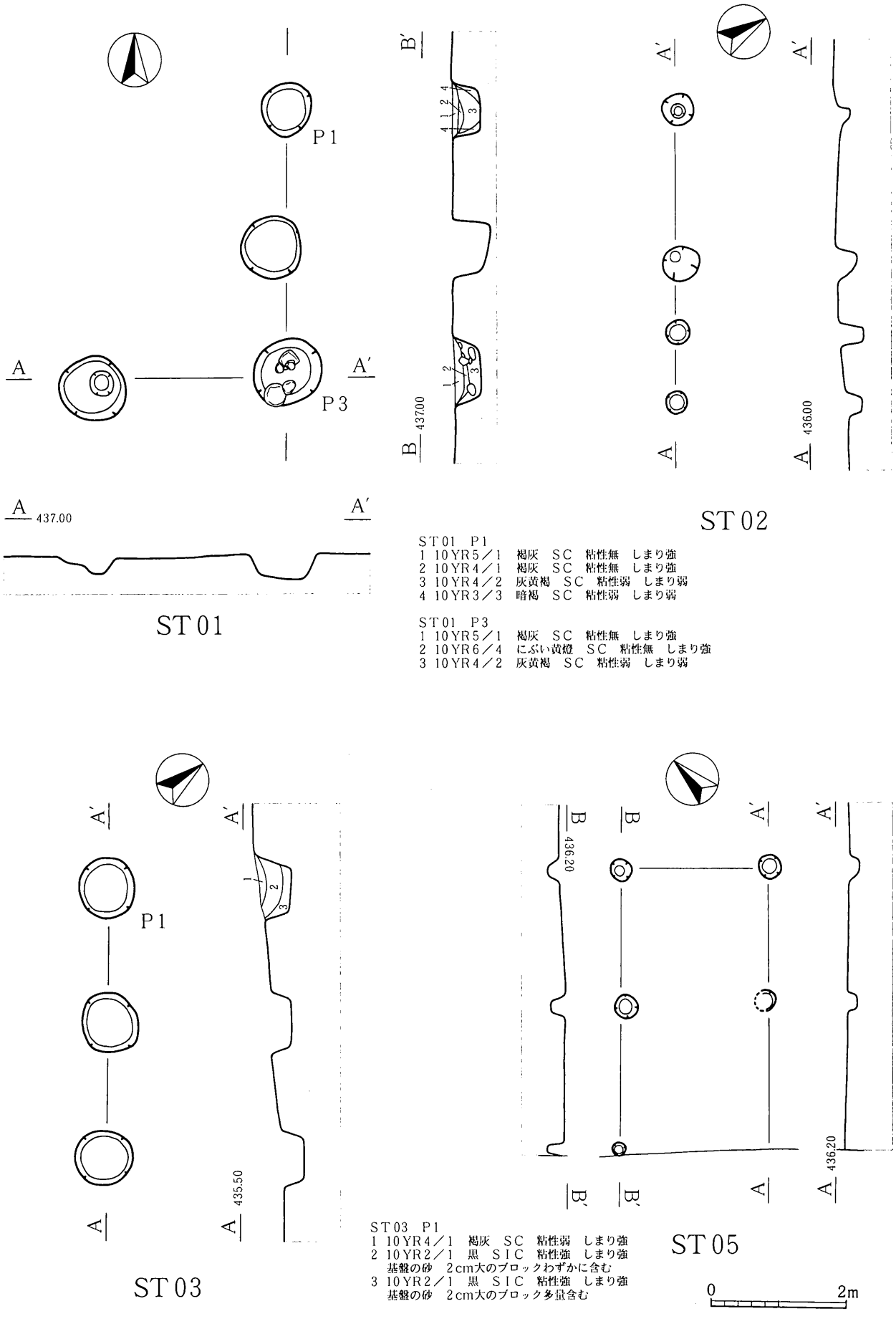
(4) 溝　址

①溝址05（ＳＤ05）（挿図14）

遺構　ＡＥ36を中心に検出した。西側はＳＢ08の貼床下で確認され、東側でＳＢ12を切り氾濫原へ延びている。確認された規模は長さ５ｍ、幅50㎝、深さ32㎝を測る。

遺物　遺物量は比較的多いが、土師器の破片資料である。

時期　重複関係から古墳時代と考えられる。



ST01　P1
1　10YR5／1　褐灰　SC　粘性無　しまり強
2　10YR4／1　褐灰　SC　粘性無　しまり強
3　10YR4／2　灰黄褐　SC　粘性弱　しまり弱
4　10YR3／3　暗褐　SC　粘性弱　しまり弱

ST01　P3
1　10YR5／1　褐灰　SC　粘性無　しまり強
2　10YR6／4　にぶい黄燈　SC　粘性無　しまり強
3　10YR4／2　灰黄褐　SC　粘性弱　しまり弱

ST03　P1
1　10YR4／1　褐灰　SC　粘性弱　しまり強
2　10YR2／1　黒　SIC　粘性強　しまり強
　基盤の砂　2cm大のブロックわずかに含む
3　10YR2／1　黒　SIC　粘性強　しまり強
　基盤の砂　2cm大のブロック多量含む

挿図13　ST

②溝址06（SD06）（挿図14）

遺構　BW43を中心に検出した。ST03に切られ、北側で氾濫原と接する。確認された規模は長さ13.6m、幅2.8m、深さ35cmを測るが、南側の調査区外へ続くと推定される。溝底部では砂が堆積し、多くの礫が混入している状況から土曽川の氾濫に伴う流水路である可能性が高い。

遺物　（挿図21・24）　土師器高杯、甕等比較的多くの遺物が出土しているが、時期が一定していない混入遺物である。

時期　不明である。

③溝址07（SD07）（挿図14）

遺構　BW41を中心に検出した。北から南へ延びている。確認された規模は長さ2.8m、幅80cm、深さ32cmを測る。

遺物　遺物は出土していない。

時期　不明である。

(5) 氾濫原　（挿図15・22・24・25）

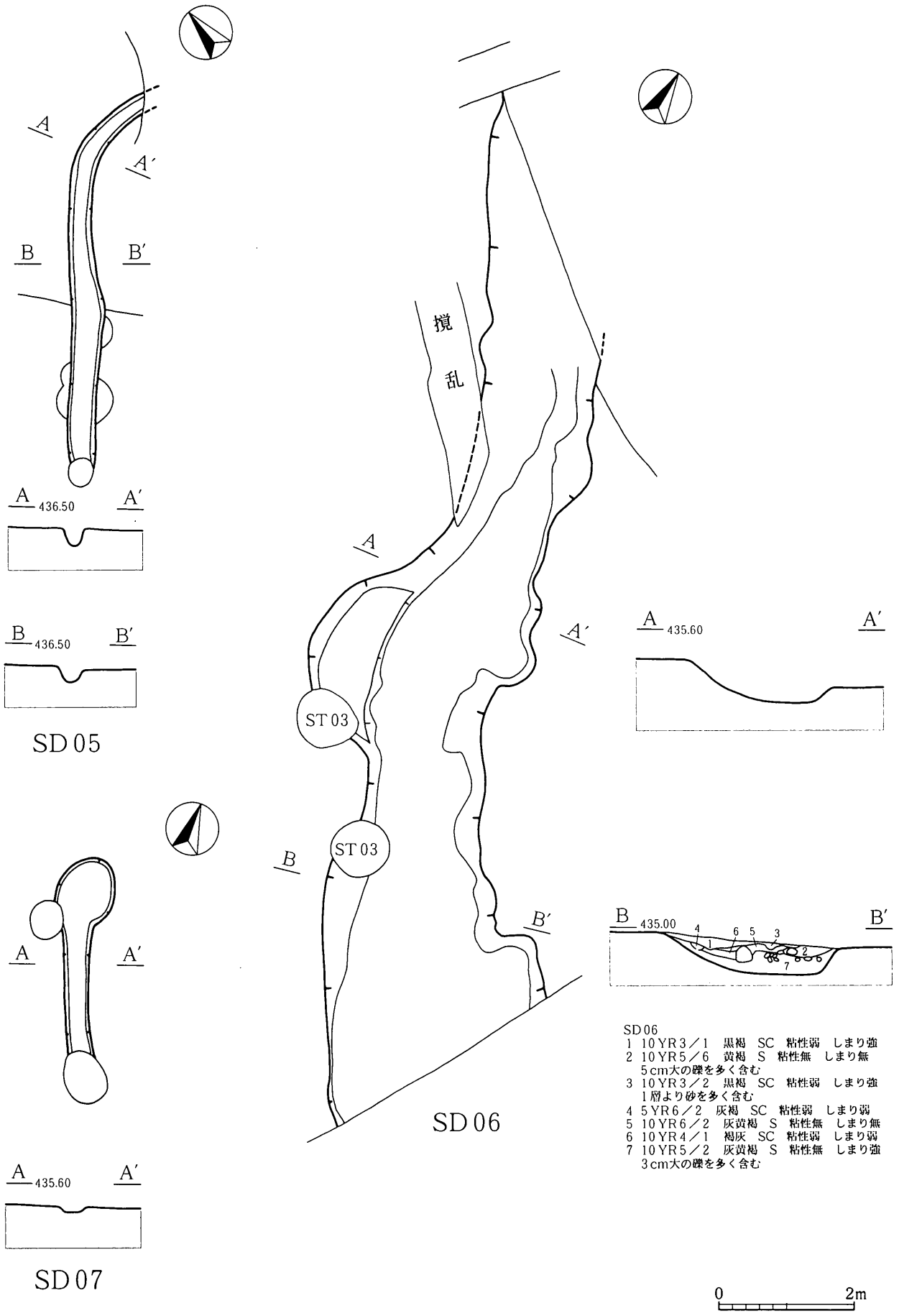
調査区の東側ほぼ半分を黒褐色の砂質土が占めていた。全面的な掘下げは時間的に不可能な為一部トレンチ調査等を行った。トレンチは黒褐色帯に直行する形で設定した。断面上では大小の円礫を含む粗砂、細砂の互層が確認された。また、AF38を中心に一部掘下げ調査を行ったが、地山は東側へ傾斜しており、検出面から90～100cm下の地点で20～30cm大の礫が密集して確認された。

これらの状況から長期間にわたる水性の堆積が推定される。調査区北東側には土曽川が平行して流れており土曽川の旧水路もしくは氾濫原である可能性が高い。

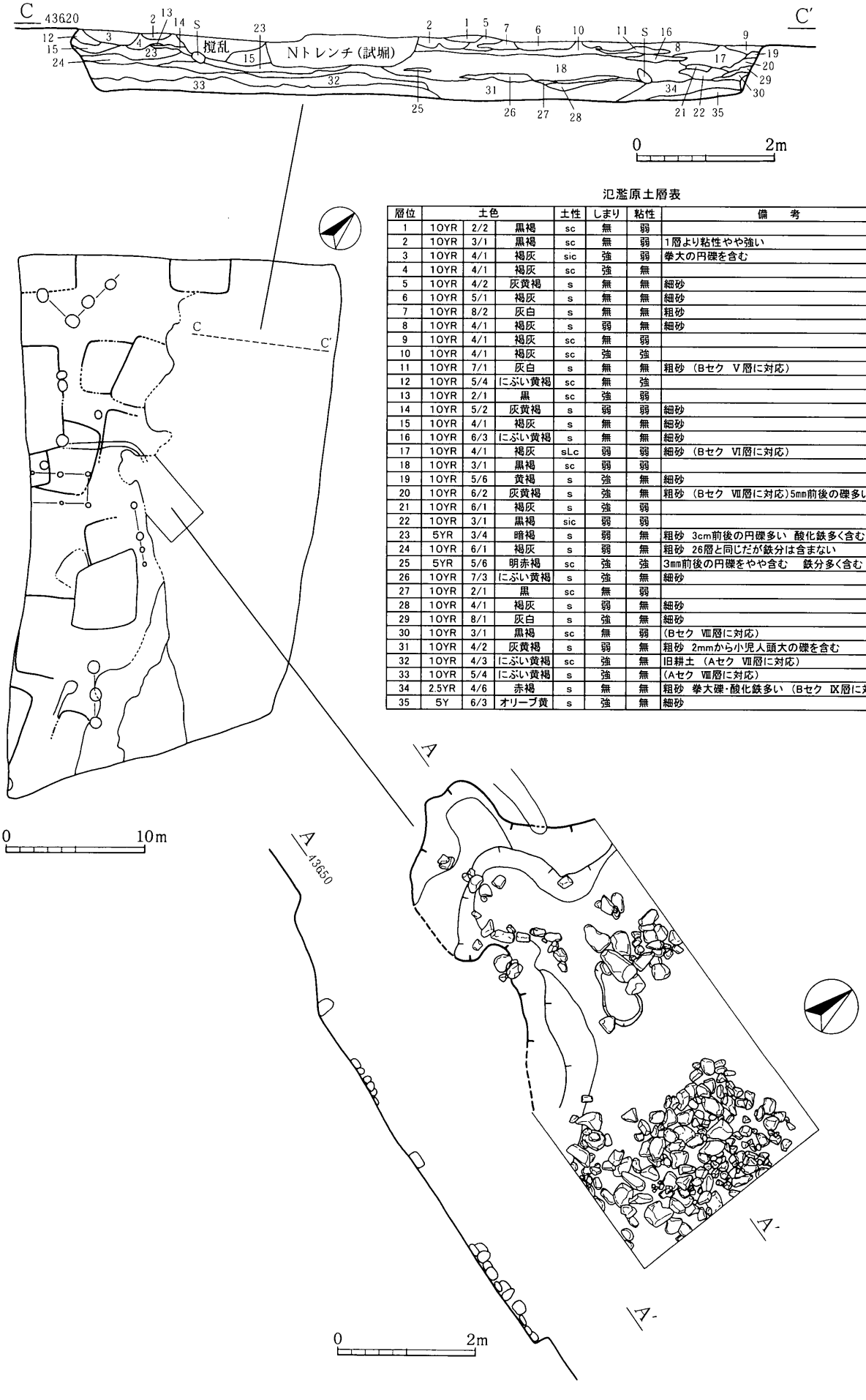
遺物は砂層の中から全体的に多く出土している。6世紀代の土師器甕などを中心に弥生時代中期から中世にかけての幅広い時期相の遺物が出土しており、上流及び周辺部からの混入遺物である。これらの遺物の内容は当遺跡周辺が長期間居住域として活用されていた事を示している。

(6) 遺構外出土遺物　（挿図23・24・25）

古墳時代の土師器を中心に縄文時代から中世にかけての遺物が多数出土している。


A
A′
B
B′
A 436.50 A′
B 436.50 B′
SD 05
A
A′
A 435.60 A′
SD 07
撹
乱
ST 03
ST 03
A
A′
B
B′
SD 06
A 435.60 A′
B 435.00 B′
1
2
3
4
5
6
7
SD 06
1 10YR3／1 黒褐 SC 粘性弱 しまり強
2 10YR5／6 黄褐 S 粘性無 しまり無
5cm大の礫を多く含む
3 10YR3／2 黒褐 SC 粘性弱 しまり強
1層より砂を多く含む
4 5YR6／2 灰褐 SC 粘性弱 しまり弱
5 10YR6／2 灰黄褐 S 粘性無 しまり無
6 10YR4／1 褐灰 SC 粘性弱 しまり弱
7 10YR5／2 灰黄褐 S 粘性無 しまり強
3cm大の礫を多く含む
0 2m

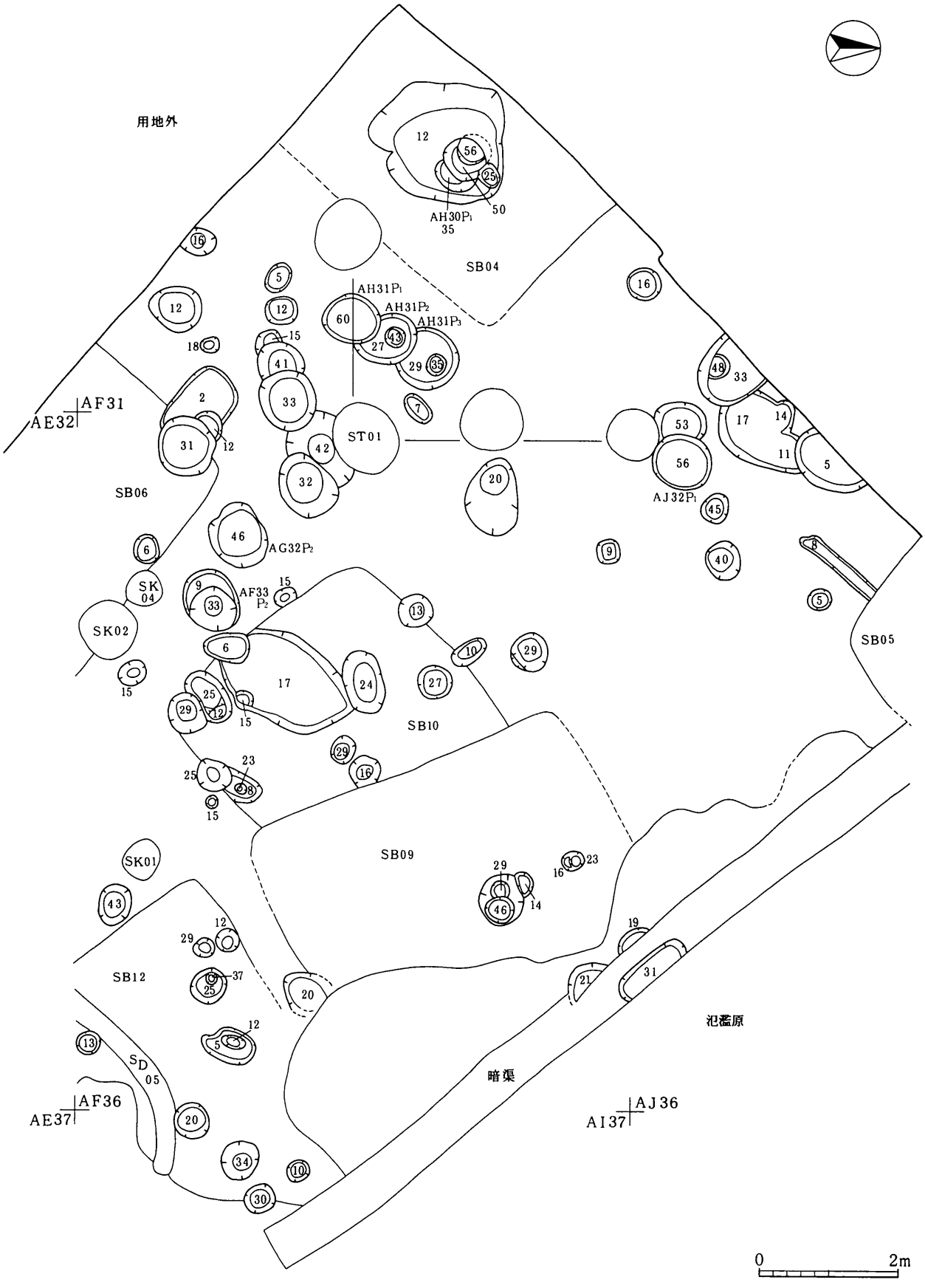
挿図14 SD



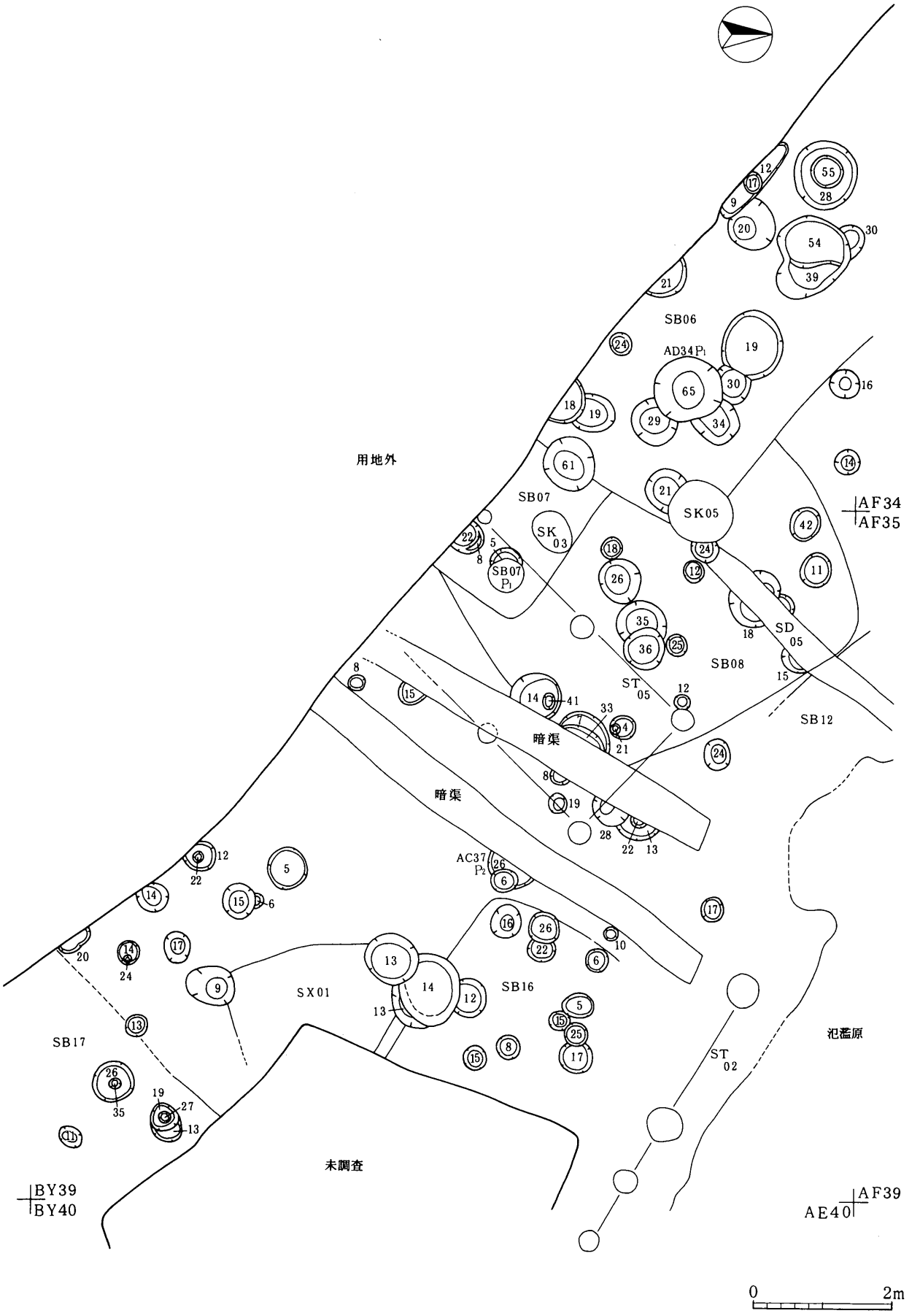
氾濫原土層表

層位	土色			土性	しまり	粘性	備　考
1	10YR	2/2	黒褐	sc	無	弱	
2	10YR	3/1	黒褐	sc	無	弱	1層より粘性やや強い
3	10YR	4/1	褐灰	sic	強	弱	拳大の円礫を含む
4	10YR	4/1	褐灰	sc	強	無	
5	10YR	4/2	灰黄褐	s	無	無	細砂
6	10YR	5/1	褐灰	s	無	無	細砂
7	10YR	8/2	灰白	s	無	無	粗砂
8	10YR	4/1	褐灰	s	弱	無	細砂
9	10YR	4/1	褐灰	sc	無	弱	
10	10YR	4/1	褐灰	sc	強	強	
11	10YR	7/1	灰白	s	無	無	粗砂（Bセク　Ⅴ層に対応）
12	10YR	5/4	にぶい黄褐	sc	無	強	
13	10YR	2/1	黒	sc	強	弱	
14	10YR	5/2	灰黄褐	s	弱	弱	細砂
15	10YR	4/1	褐灰	s	無	無	細砂
16	10YR	6/3	にぶい黄褐	s	無	無	細砂
17	10YR	4/1	褐灰	sLc	弱	弱	細砂（Bセク　Ⅵ層に対応）
18	10YR	3/1	黒褐	sc	弱	弱	
19	10YR	5/6	黄褐	s	強	無	細砂
20	10YR	6/2	灰黄褐	s	強	無	粗砂（Bセク　Ⅶ層に対応）5mm前後の礫多い
21	10YR	6/1	褐灰	s	強	弱	
22	10YR	3/1	黒褐	sic	弱	弱	
23	5YR	3/4	暗褐	s	弱	無	粗砂　3cm前後の円礫多い　酸化鉄多く含む
24	10YR	6/1	褐灰	s	弱	無	粗砂　26層と同じだが鉄分は含まない
25	5YR	5/6	明赤褐	sc	強	強	3mm前後の円礫をやや含む　鉄分多く含む
26	10YR	7/3	にぶい黄褐	s	強	無	細砂
27	10YR	2/1	黒	sc	無	弱	
28	10YR	4/1	褐灰	s	弱	無	細砂
29	10YR	8/1	灰白	s	強	無	細砂
30	10YR	3/1	黒褐	sc	無	弱	（Bセク　Ⅷ層に対応）
31	10YR	4/2	灰黄褐	s	弱	無	粗砂　2mmから小児人頭大の礫を含む
32	10YR	4/3	にぶい黄褐	sc	強	無	旧耕土　（Aセク　Ⅶ層に対応）
33	10YR	5/4	にぶい黄褐	s	強	無	（Aセク　Ⅷ層に対応）
34	2.5YR	4/6	赤褐	s	無	無	粗砂　拳大礫・酸化鉄多い（Bセク　Ⅸ層に対応）
35	5Y	6/3	オリーブ黄	s	強	無	細砂

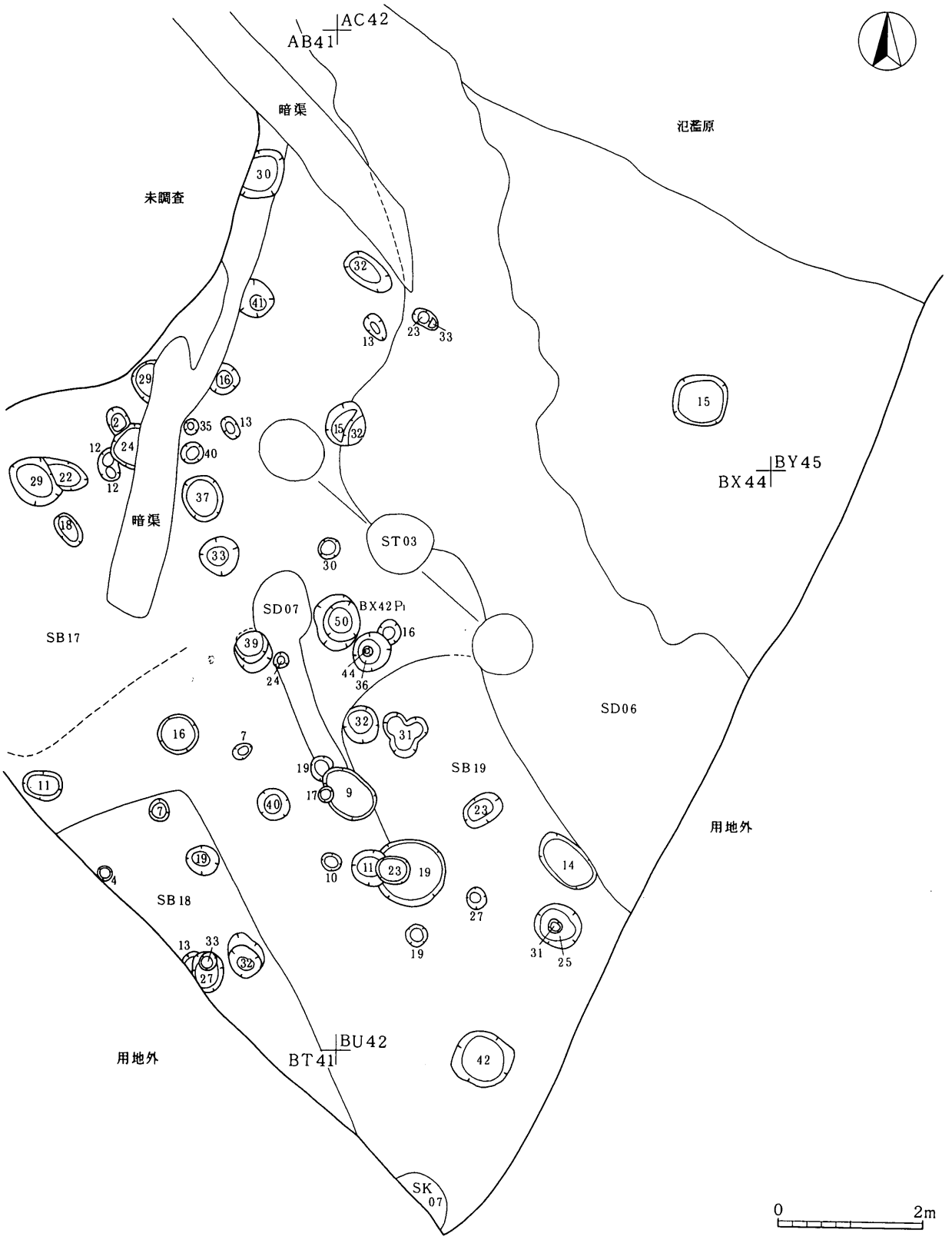
挿図15　氾濫原



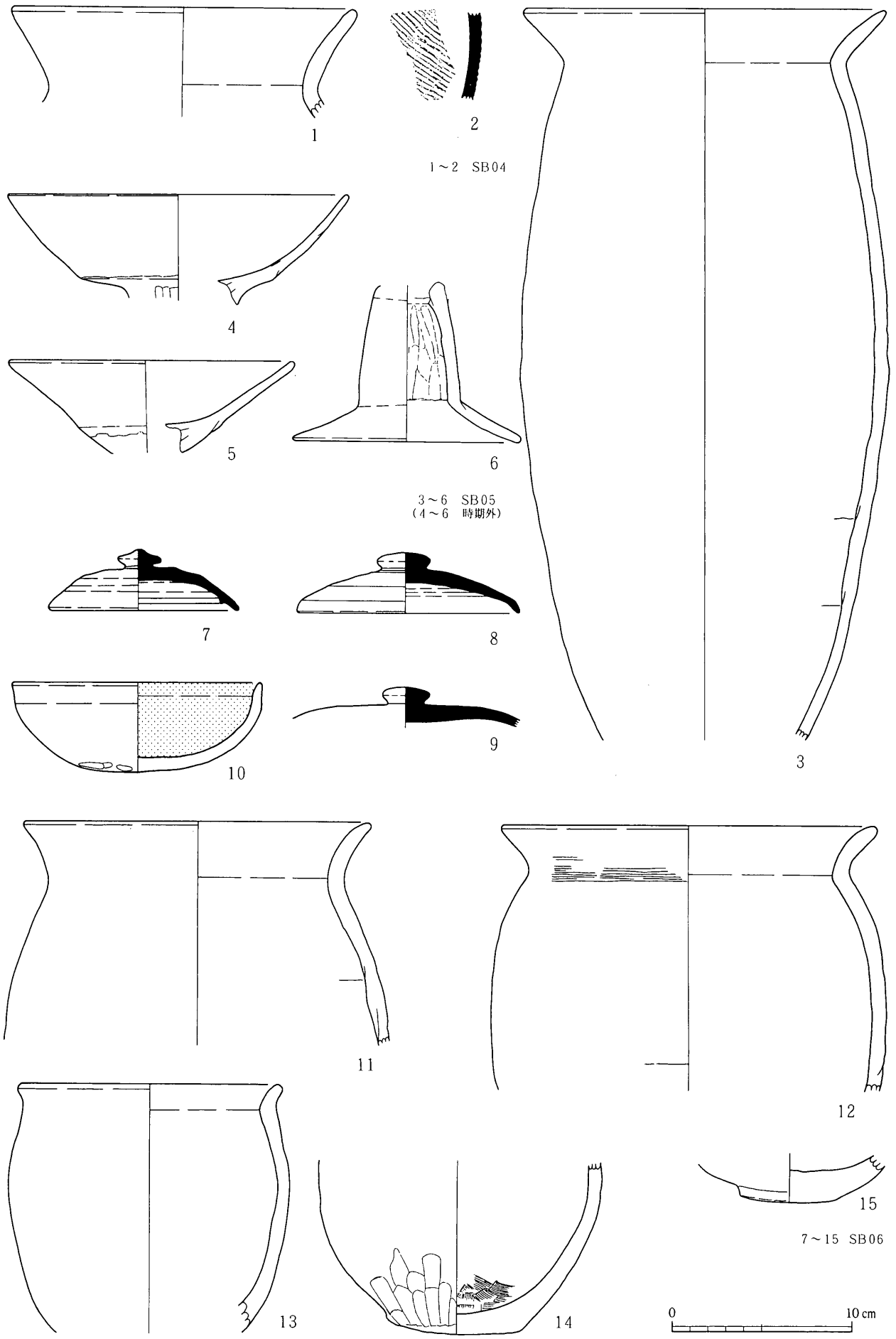
挿図16　周辺ピット図①



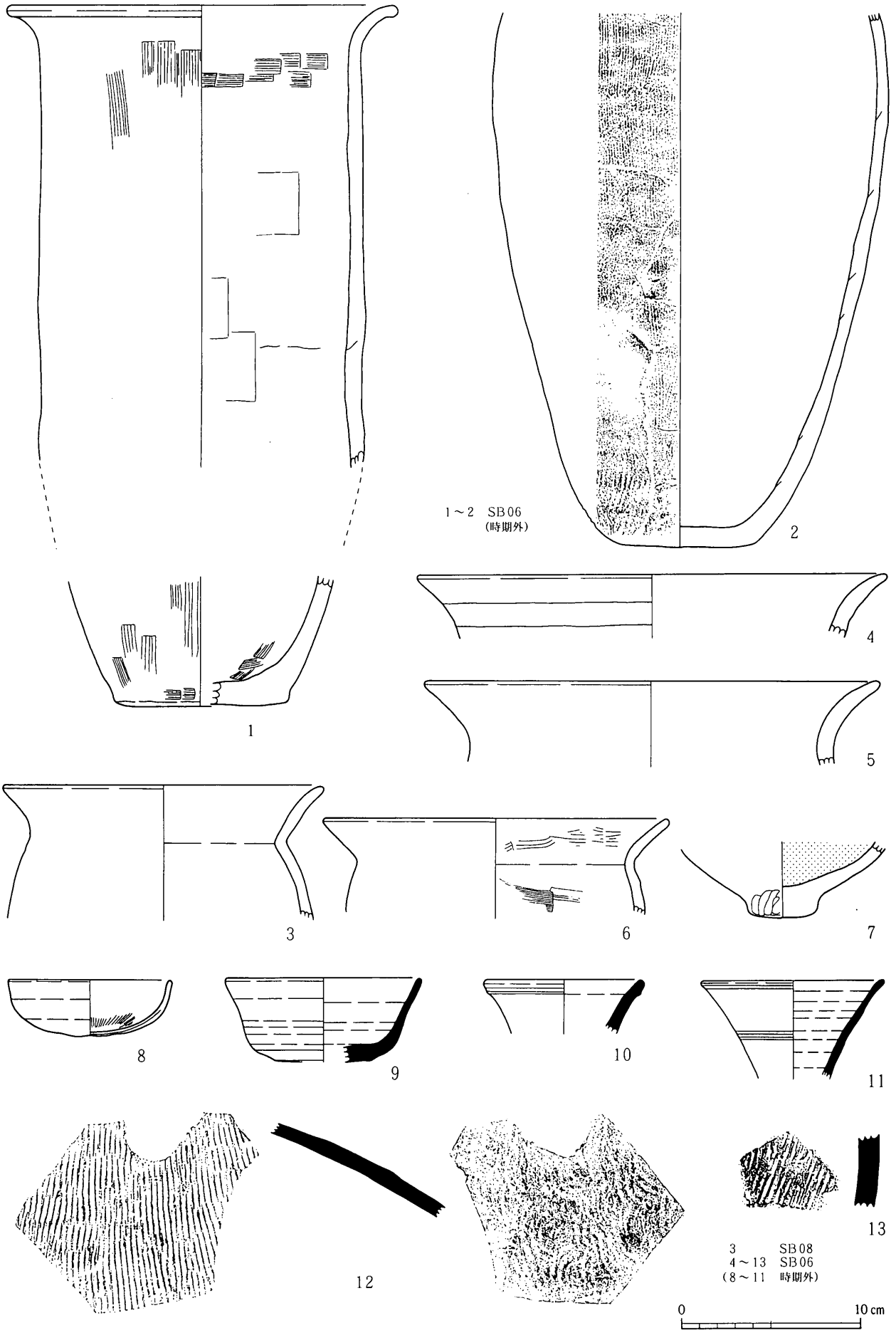
挿図17　周辺ピット図②



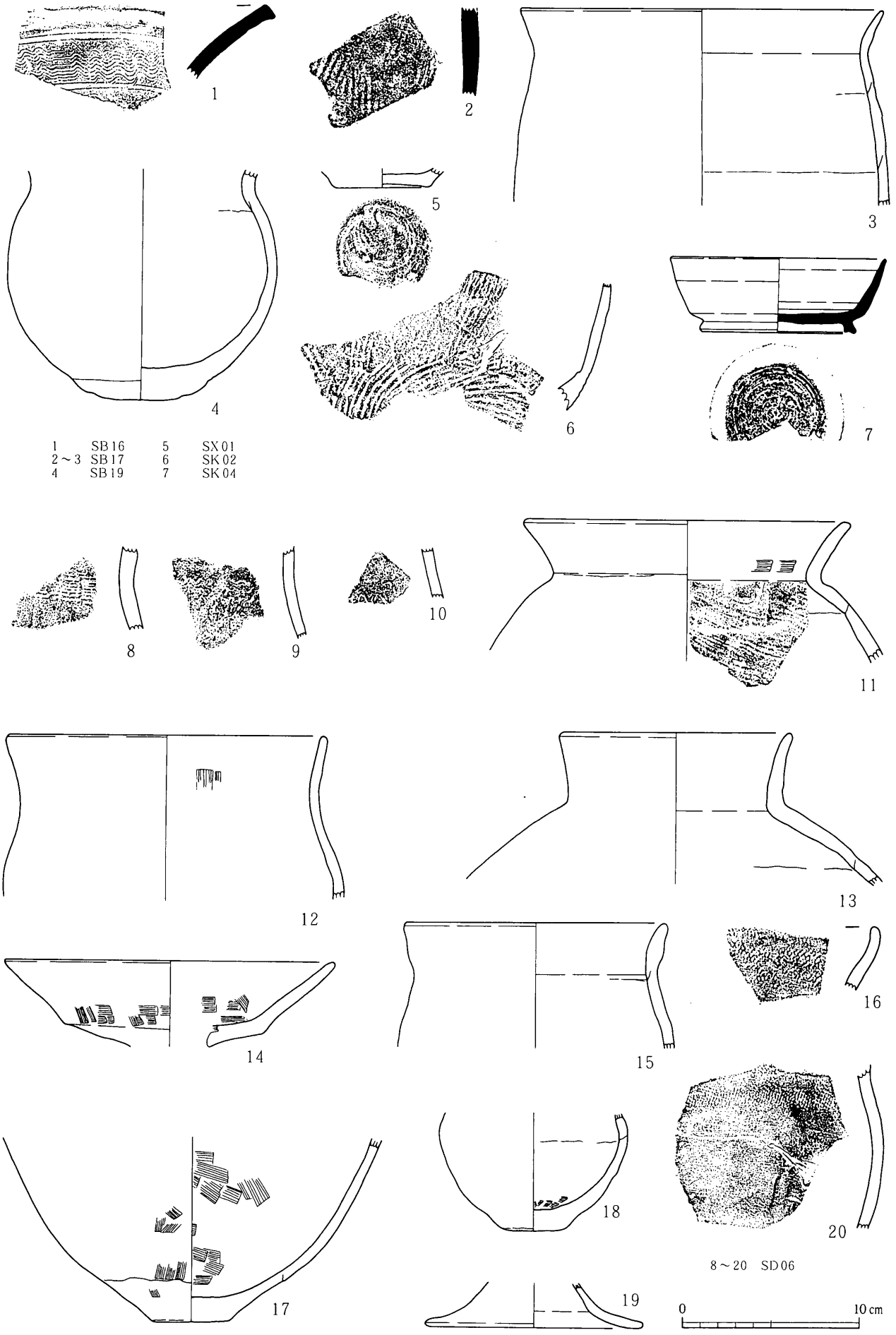
挿図18　周辺ピット図③


1
2
1～2 SB04
4
5
6
3～6 SB05
(4～6 時期外)
7
8
9
10
3
11
12
13
14
15
7～15 SB06
0
10cm

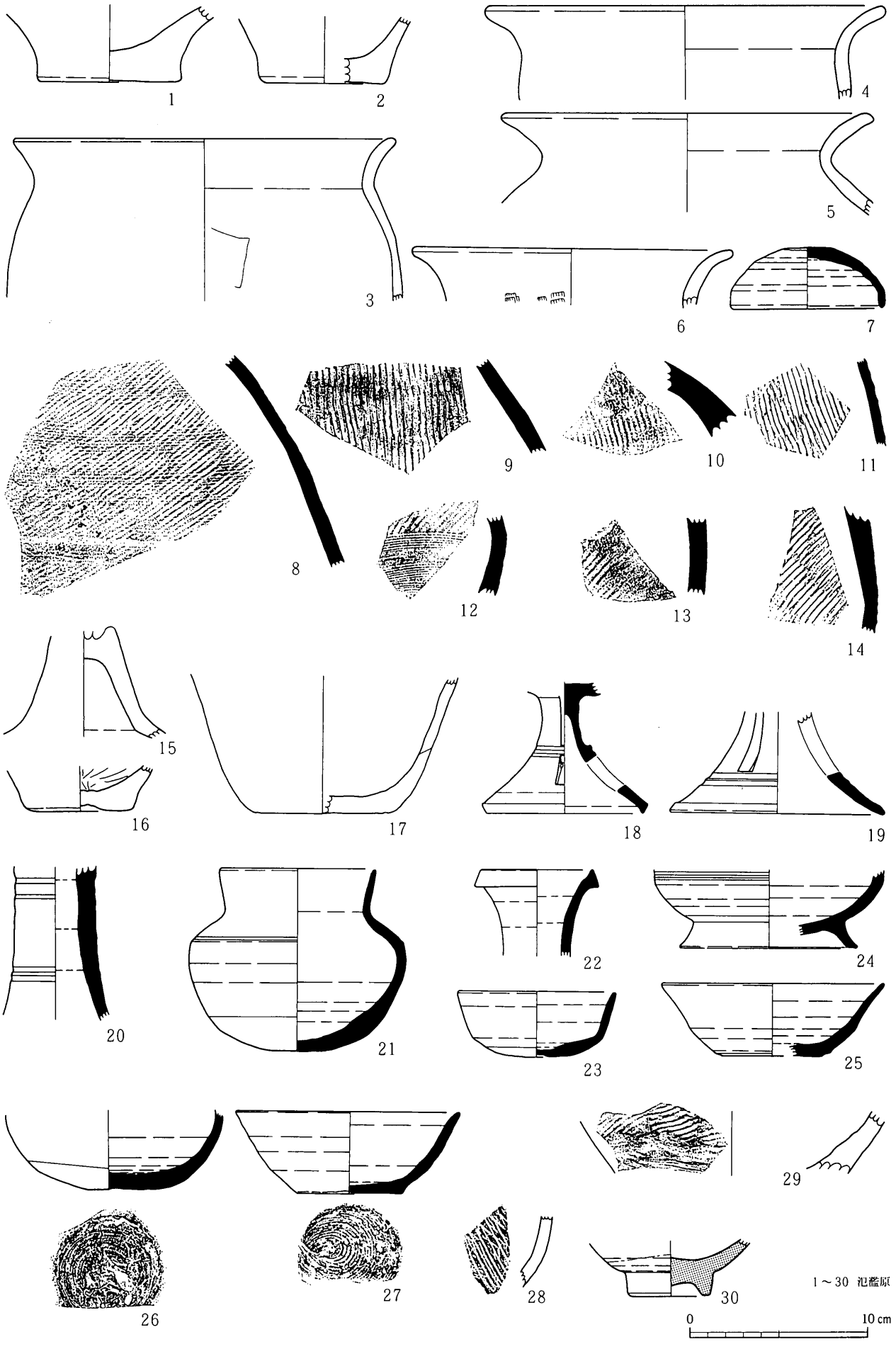
挿図19　出土遺物



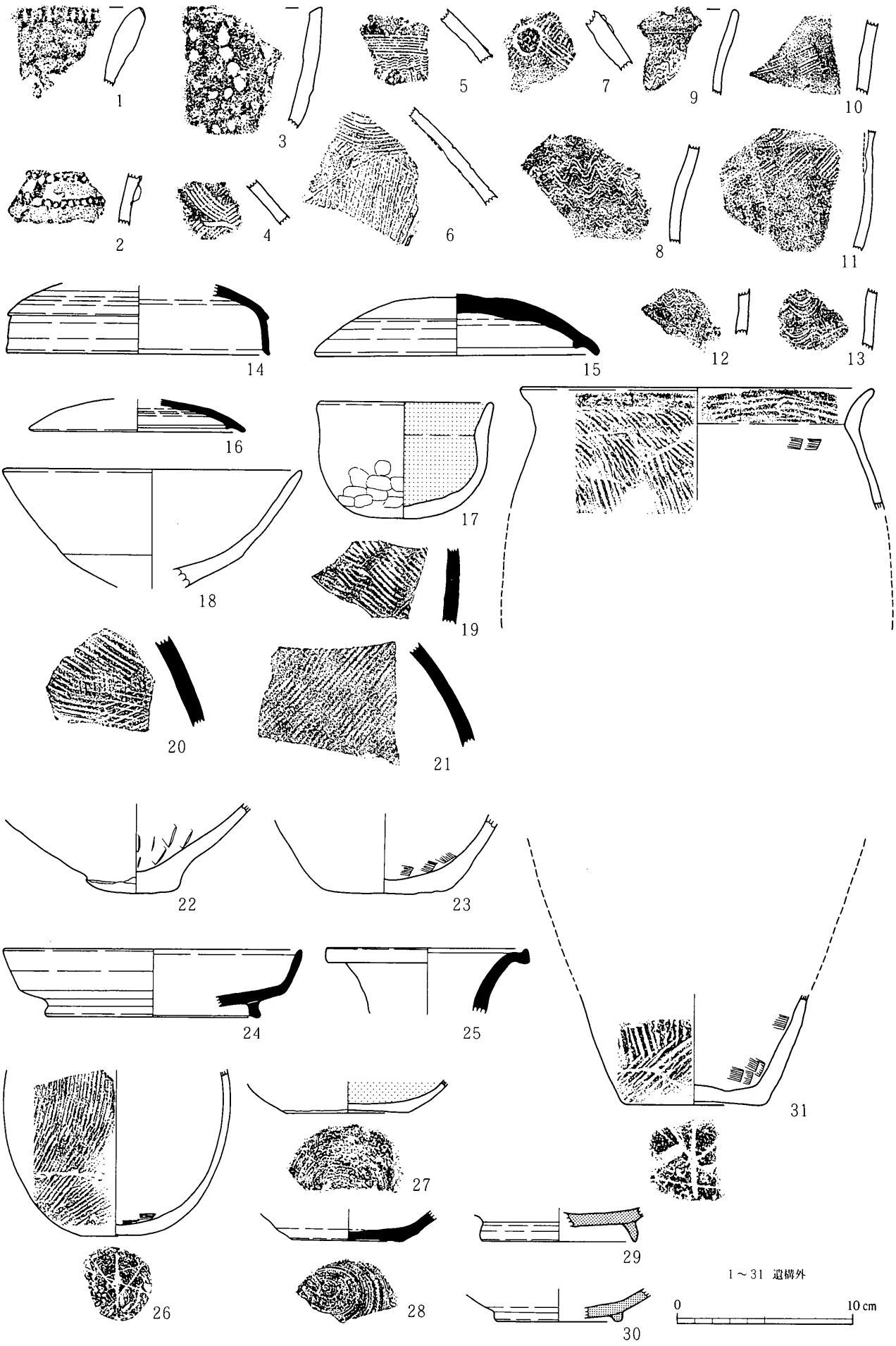
挿図20　出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
1 SB16
2～3 SB17
4 SB19
5 SX01
6 SK02
7 SK04
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
8～20 SD06
0
10cm

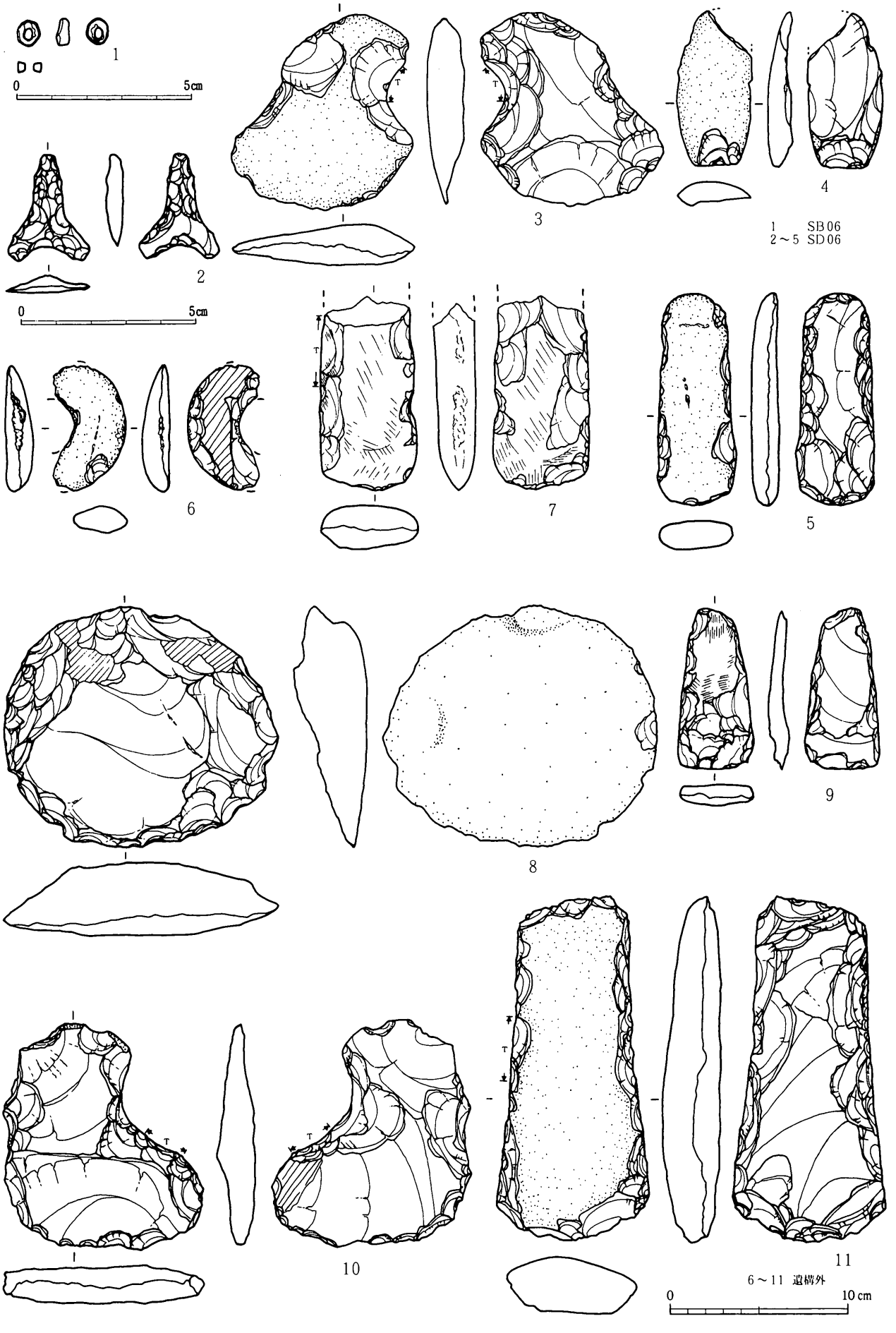
挿図21　出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
1～30 氾濫原
0
10 cm

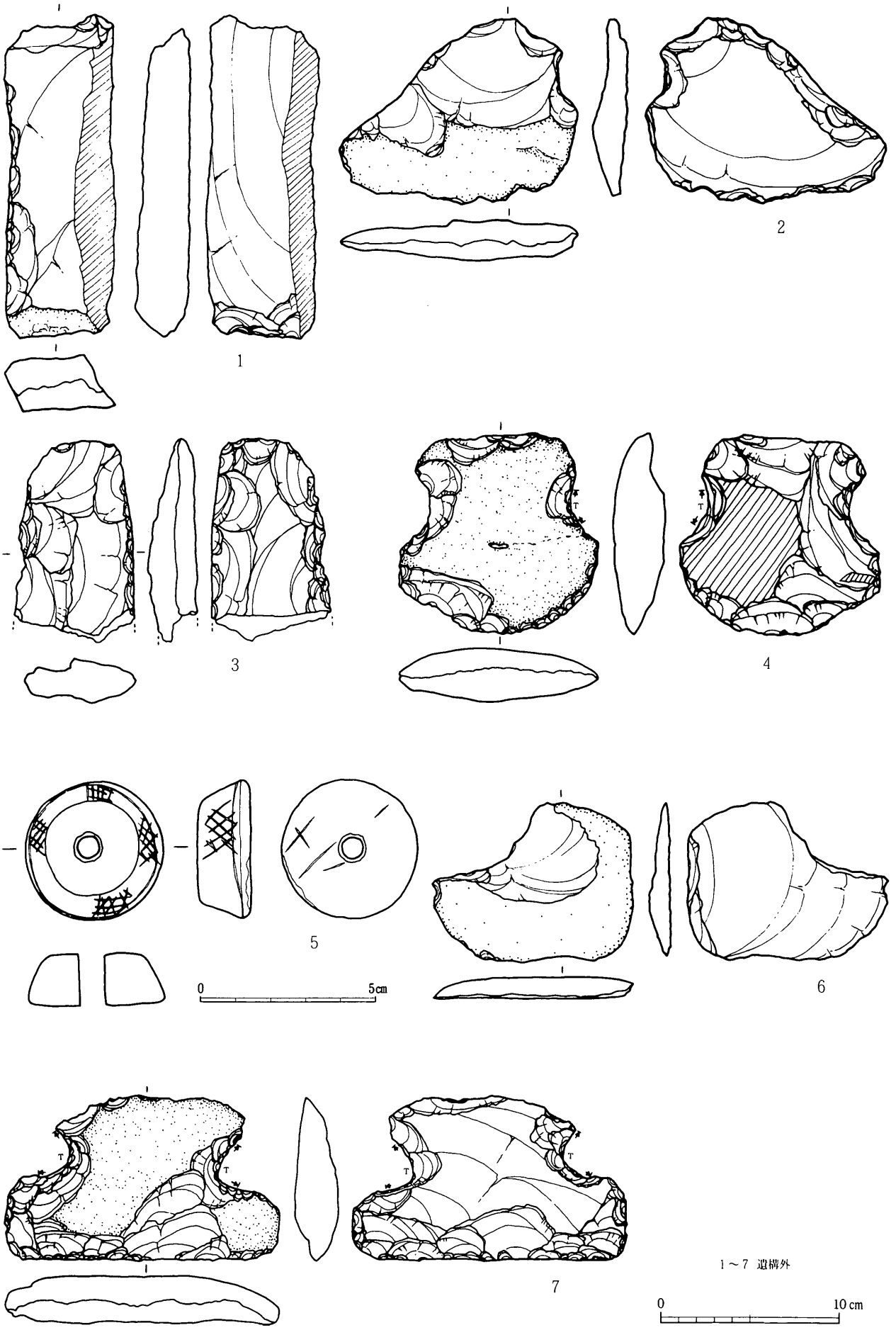
挿図22　出土遺物



挿図23　出土遺物



挿図24　出土遺物



挿図25　出土遺物

第4章　まとめ

今次調査で検出された遺構はすでに述べてきたところである。発掘調査・整理作業共に限られたものであり十分とは言えないが、今章において各時代の気づいた点を述べる事でまとめとしたい。

第1節　遺跡の立地

今回の発掘調査は面積的に広い範囲ではなかったが、調査に先立つ試掘調査で確認された遺構分布状況を含めて考えるとおぼろげながらママ下遺跡の立地状況が窺い知る事が出来る。

調査区の北側半分は上述したとおり広い範囲で砂質層が厚く堆積していた。地形状況より北から南へ水の流れが見てとれ、約70m離れた現在の土曽川の川筋と平行している事から土曽川の氾濫原と判断した。周辺部でも平成10年・14年度に実施した試掘調査において土曽川に平行した部分で同様の堆積が見られた。近世においても大雨による土曽川の氾濫が何度もおきている事が知られており、沿岸部の広い範囲にわたって氾濫原が形成されていると思われる。

遺跡西側については、今回試掘の段階で6本のトレンチ（A～Fトレンチ）を設定した。約60～120cm下の黒褐色砂礫土層まで調査したが遺構・遺物確認されなかった。一部のトレンチでは湧水も確認され広い範囲で湿地である事が判明した。この湿地帯は南側で隣接する飯沼丹保遺跡・橋爪遺跡でも検出されており、かなり南側まで帯状に続いている。

このようにママ下遺跡の集落は、北側で土曽川の氾濫原、南側で湿地帯に挟まれた幅約100mの狭い微高地上に形成されている。東側で隣接し、土曽川沿いの同一面上に立地する飯沼堂垣外遺跡においても古墳時代から平安時代にかけての集落が確認されており、両遺跡は密接な関係を持つと考えられる。これらの遺跡において弥生時代から平安時代まで長期間集落が継続された要因には周辺に広がる湿地帯を利用した水田耕作地の存在が考えられ、安定した食料生産に支えられた結果と推測する。また、律令期の中心地域である恒川遺跡群を北側にひかえている地域的特徴も集落の継続を考えるうえで見落とせない点である。

第2節 各時代の概要

(1) 縄文時代

今回該期の遺構は確認されなかったが、土器片2点と石鏃1点が出土した。土器について一点は口縁部に刻みを持つ深鉢と思われる破片で、もう一点は縦横の隆帯に圧痕が加えられている破片である。それぞれ縄文時代晩期と考えられる資料である。石鏃は頁岩製の無茎鏃である。この3点の出土位置は、調査区北側の氾濫原砂層中及び溝址覆土中である為原位置を示していないが、調査区周辺に遺構の存在が推測される。

周辺遺跡の状況を見ると、前述した飯沼丹保遺跡において縄文中期後葉の住居址が2軒確認されているが、近隣遺跡を含めて晩期の遺構・遺物の出土例は現在の時点で無い。ただ、該期の遺構は全域的に検出が困難である点も考慮せねばならず、その分布等についての検討は今後の資料の増加を待つべきであろう。

(2) 弥生時代

弥生時代についても縄文時代同様遺構は検出されず遺物のみの確認である。これらの遺物は有肩扇状形石器などの石器類や土器の破片資料であるが、土器に施文されている文様から中期北原式と後期座光寺原式と大まかに二時期に分けられる。これらの遺物も氾濫原・溝址からの出土が多いが、中には調査区南側の微高地上のピット内から出土するものもある。また、試掘時に該期の住居址と考えられる遺構を北側の調査区外で検出しており、遺構が調査区外に分布している可能性は非常に高いと言える。

周辺の状況を見ると、前述した飯沼丹保遺跡では、平成３年度の発掘調査で弥生時代の竪穴住居址が138軒（中期６軒・後期132軒）確認されており、下伊那の低位段丘面を代表する拠点的大集落として位置づけられている。その北側に立地する飯沼堂垣外遺跡においても中期の住居址が1軒確認されており、周辺における該期集落の存在は確認されている。

今回限られた範囲の中での調査であったが、遺物の出土状況・周辺遺跡の立地状況等を考慮すると、周辺に広がる水田可耕地を背景とした該期の集落が立地していた可能性は高いと言える。該期についても今後の調査事例の増加を待って詳細な検討が必要である。

(3) 古墳時代

該期が今次調査の主体となる時代である。今回住居址12軒、掘立柱建物址３棟を確認したが、遺物より６世紀後半から７世紀にかけての古墳時代後期のものでる。

遺構は氾濫原西側の微高地上に密集しており、一部当該住居址が重複している状況から数時期に細分される可能性が高い。しかし、床面や掘方での検出状況が多かった為時期の決め手となる遺物の出土が非常に少なく、各遺構における器種組成を明確に捉える事が出来なかった。このような状況の為、時期の細分は今後の課題とし、今回は遺構の時期を古墳時代後期という枠組みで捉えておきたい。

遺構としては確認されなかったが氾濫原や溝址・住居址覆土等から混入遺物として５世紀代の遺物が少なからず出土しており、該期の遺構の存在も十分推測される。

前述した飯沼堂垣外遺跡では該期の住居址が14軒出土しており、一時期の集落を形成していた事が確認されている。ママ下遺跡と飯沼堂垣外遺跡はその地形的関係から本来同一集落と考えられ、今次調査における遺物の様相や飯沼堂垣外遺跡の状況から古墳時代集落の立地はおよそ５世紀からはじまり７世紀末まで続いていると考えられる。

今回調査区内の微高地上で比較的多くの遺構を確認したが、長期にわたる集落の継続期間を考えると今回の軒数はその断片的な数を示しているにすぎない。実際西側の調査区外でも試掘時に該期と思われる住居址、建物址群を多く検出しており、これらの状況から推測すると100軒規模の単位で住居址が立地していたと考えても過言ではない。

(4) 奈良・平安時代以降

該期については平安時代と思われる土坑２基（SK02・04)、中世と思われる建物址１棟（ST05）が確認されており、その他は遺構外から出土した遺物での確認である。

奈良時代については、土師器杯、須恵器杯・広口壺等の遺物が氾濫原を中心に遺構外から出土してお

り、平安時代についても上述の土坑２基をはじめとして土師器甕・須恵器杯・灰釉陶器片等が遺構外から出土している。遺構での確認が不足している為詳細な分析は出来ないが、今次調査の検出面上層において住居址の貼床が調査区壁面上より一部観察でき、該期の集落が上層に分布していた可能性は高い。

周辺の遺跡を見ても、前述した飯沼堂垣外遺跡では該期の住居址が49軒調査されている。その中の一部大型住居址から三彩陶器・円面硯・銅製帯金具などの特殊な遺物が出土しており、地方官衙に関連する集落遺跡として理解され重要な位置を占める。

古墳時代同様当遺跡と飯沼堂垣外遺跡は密接な位置関係であり、飯沼堂垣外遺跡の集落範囲がママ下遺跡にも及んでいる可能性は高い。そのような意味で今回調査担当者の力不足で遺構が把握出来なかった事は遺憾であるが、出土した遺物の持つ意味は非常に大きく、今後の検討資料として重要である。

ママ下遺跡は比較的大規模な複合遺跡であり、上郷・座光寺地区の古代社会を考える上で貴重な遺跡である。調査担当者の努力不足が大きく、十分に成果を示すことが出来なかったのは遺憾であるが、調査を実施出来たことは非常に意義のあるものである。近年ママ下遺跡についてその地名から「馬牧」関連遺跡として捉える論考（宮澤　2002）が見られるが、それらを含め集落の性格的な位置づけについては今後の重要検討課題である。

最後に、今回の調査を実施するにあたり埋蔵文化財の保護に多大なるご理解をいただいた地権者の方々、㈱ダイナム、㈱丸三建設には厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

下伊那地質誌編集委員会編　1976　『下伊那の地質解説』
上郷史編集委員会　1978　『上郷史』
(財)長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料編全１巻（4）遺構・遺物
下伊那教育会　1991　『下伊那史』第1巻
上郷町教育委員会　1993　『丹保遺跡』
飯田市教育委員会　1994　『堂垣外・橋爪・藪上・長橋遺跡』
飯田市教育委員会　1998　『細新遺跡』
(財)長野県埋蔵文化財センター　1999　『榎田遺跡』
西山　克己　2001　「下伊那地域の古墳群形成の推移と在地豪族達の盛衰」『伊那』６月号
宮澤　恒之　2002　「伊那郡衙域周辺の馬牧情報－上郷堂垣外遺跡をふくむ地名の検討－」『伊那』９月号

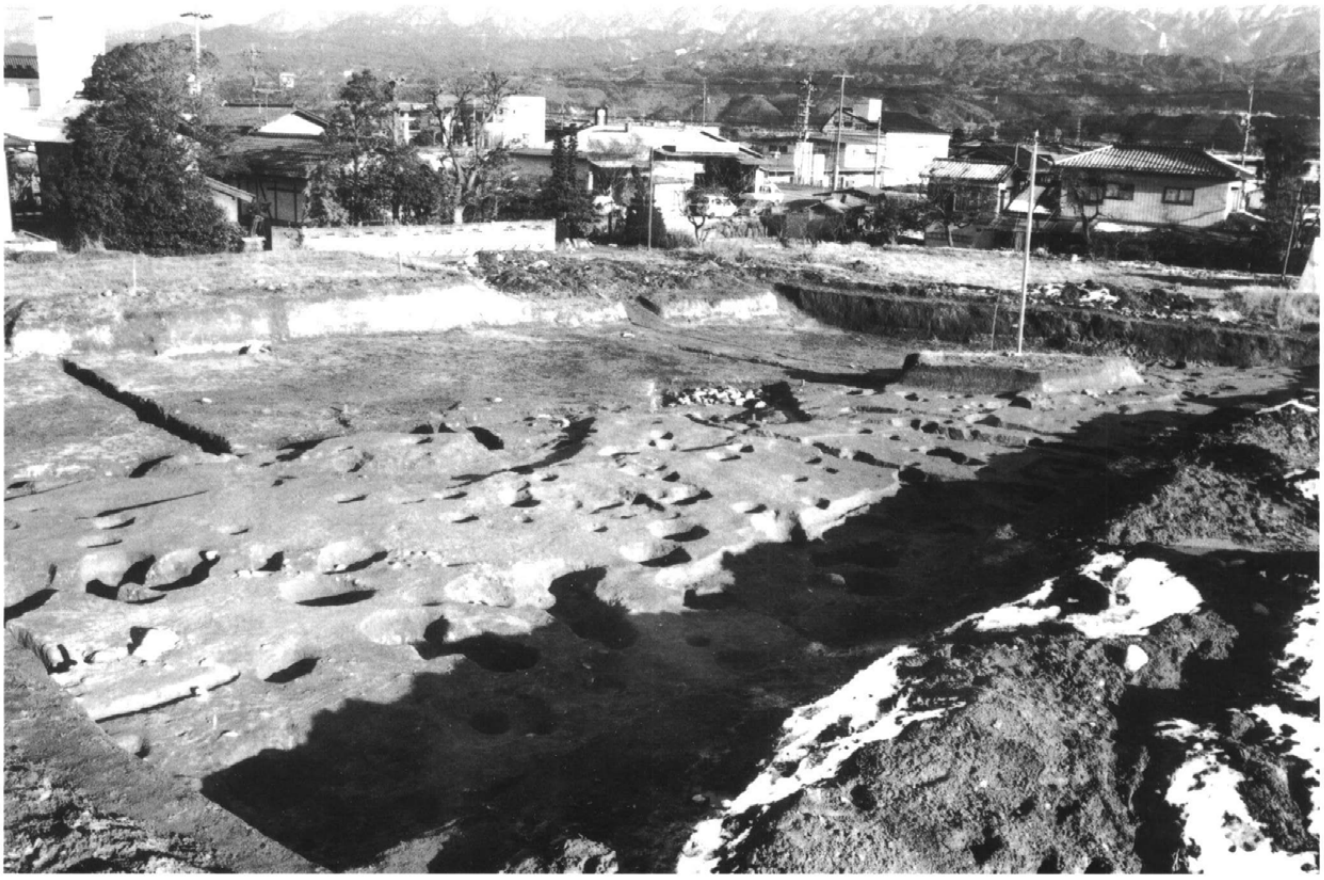
遺跡遠景

調査前風景

図版 2

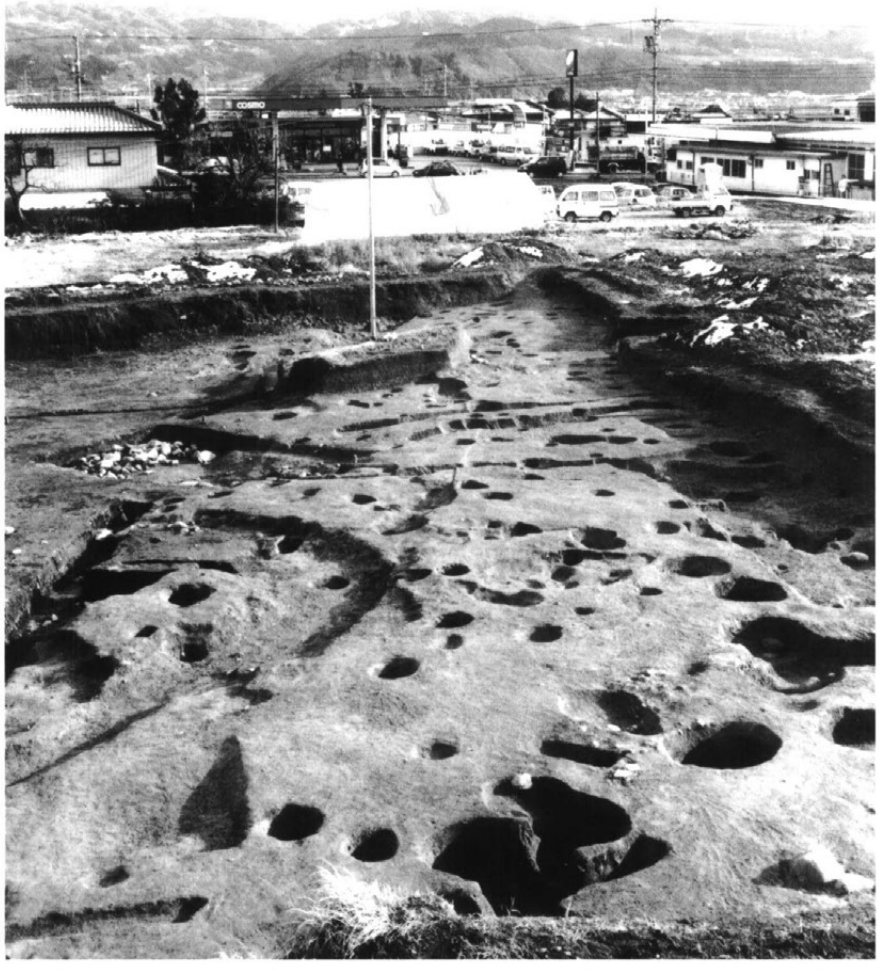
調査区全景（南から）

調査区全景（南から）

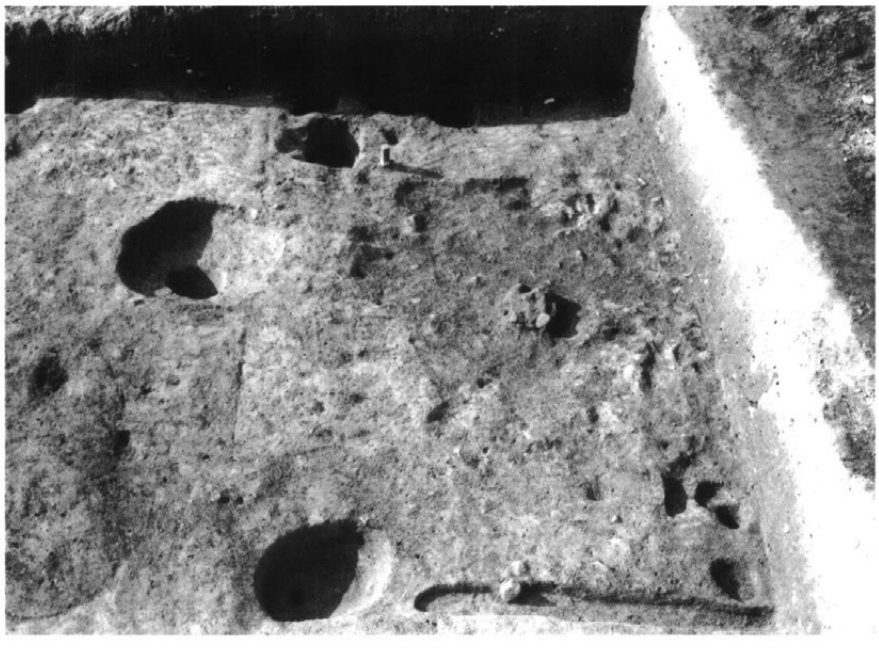


調査区全景（西から）

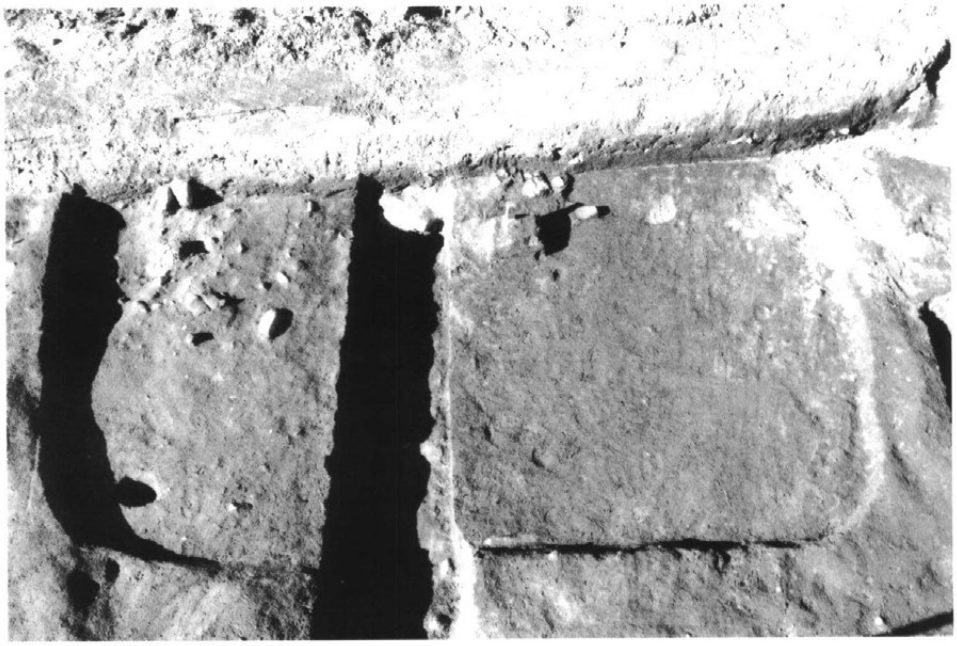
調査区全景（北から）



調査区全景（北から）

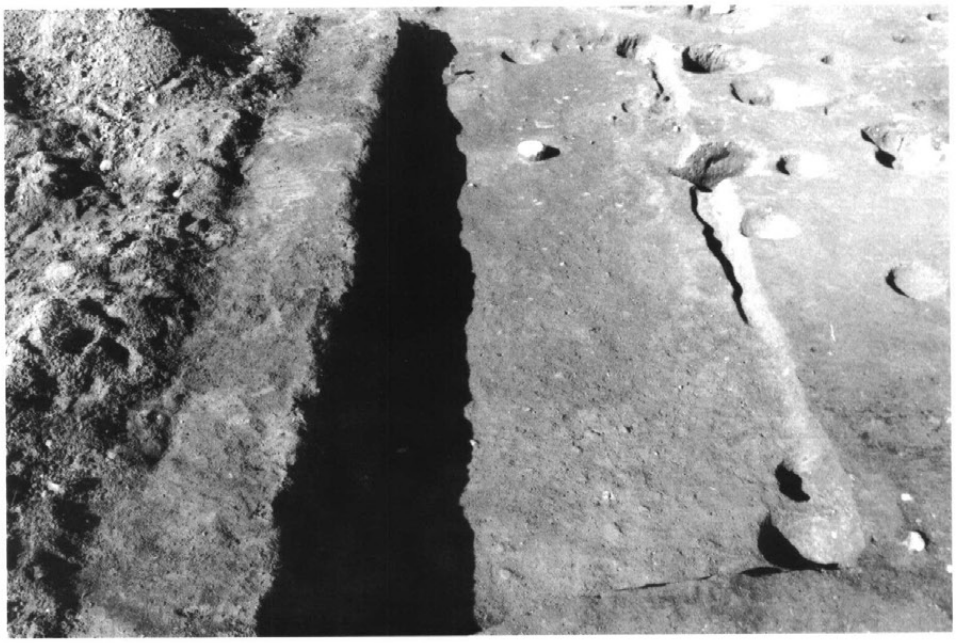


SB04



SB05

SB05
遺物出土状況



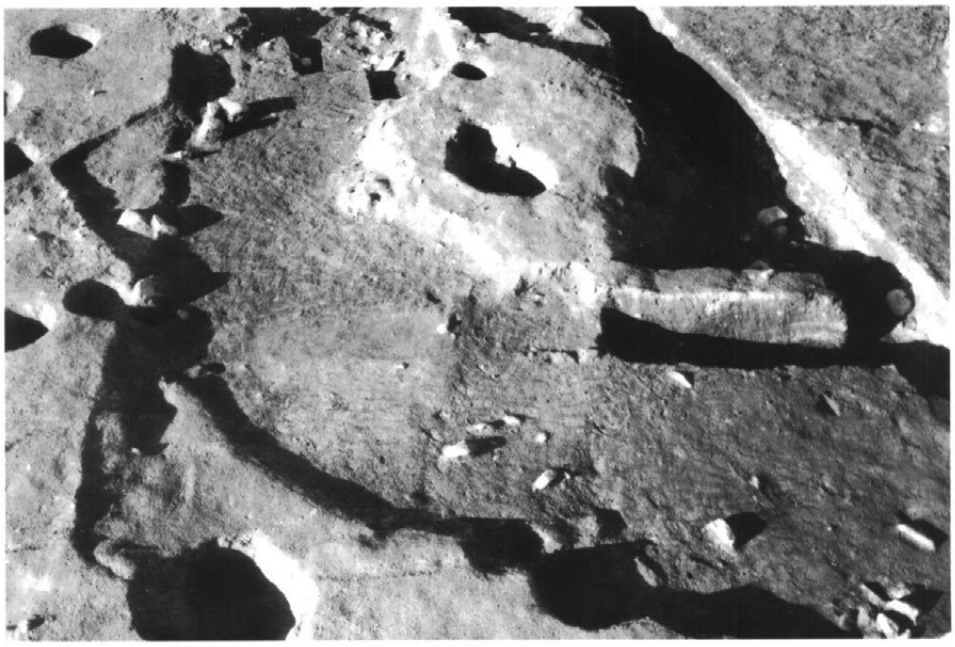
SB06

図版 6

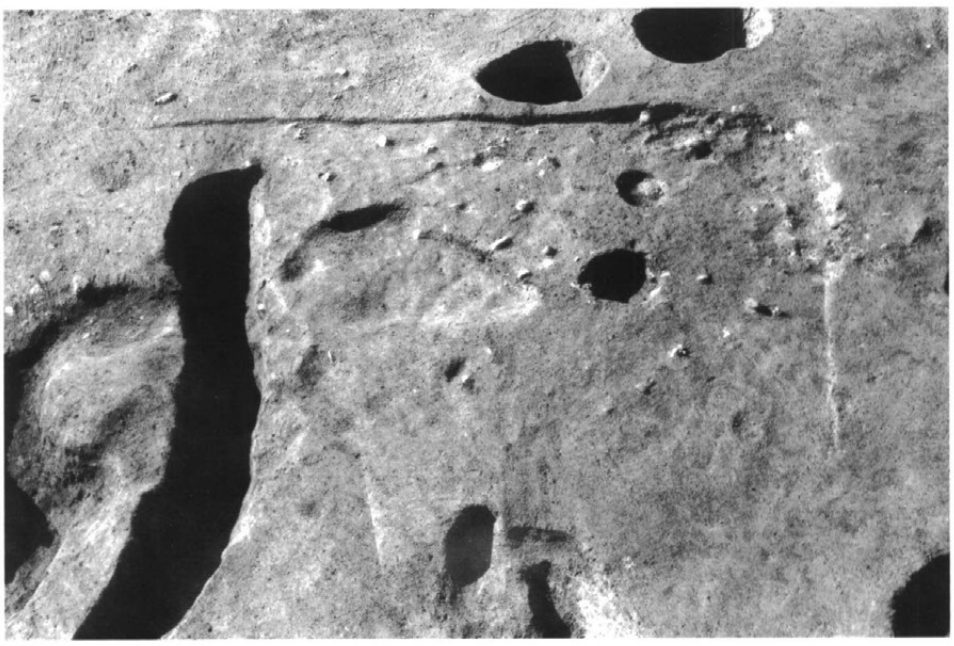
SB07

SB08

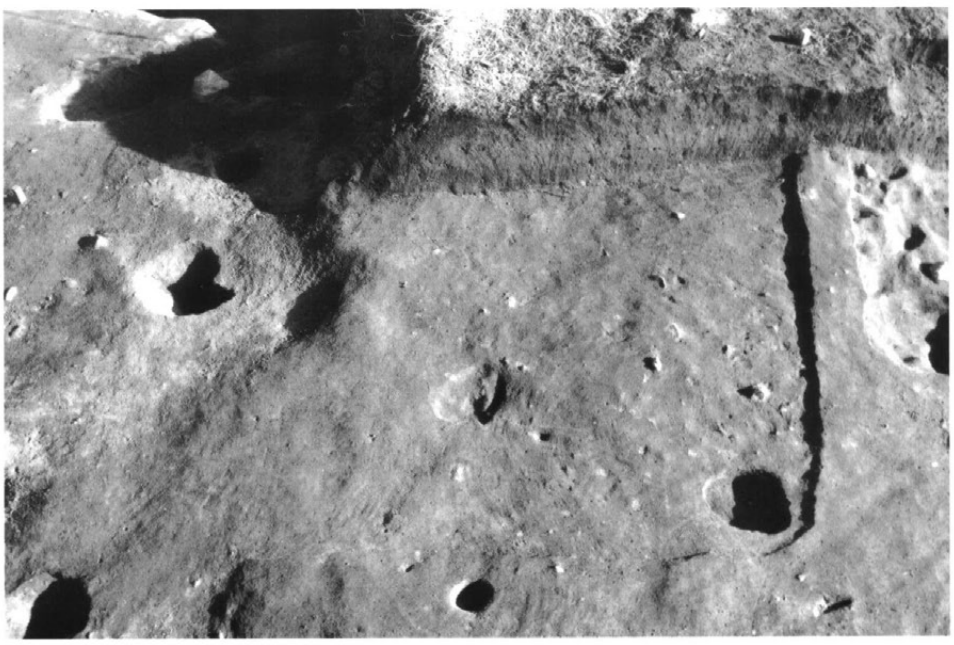
SB08
遺物出土状況



SB09

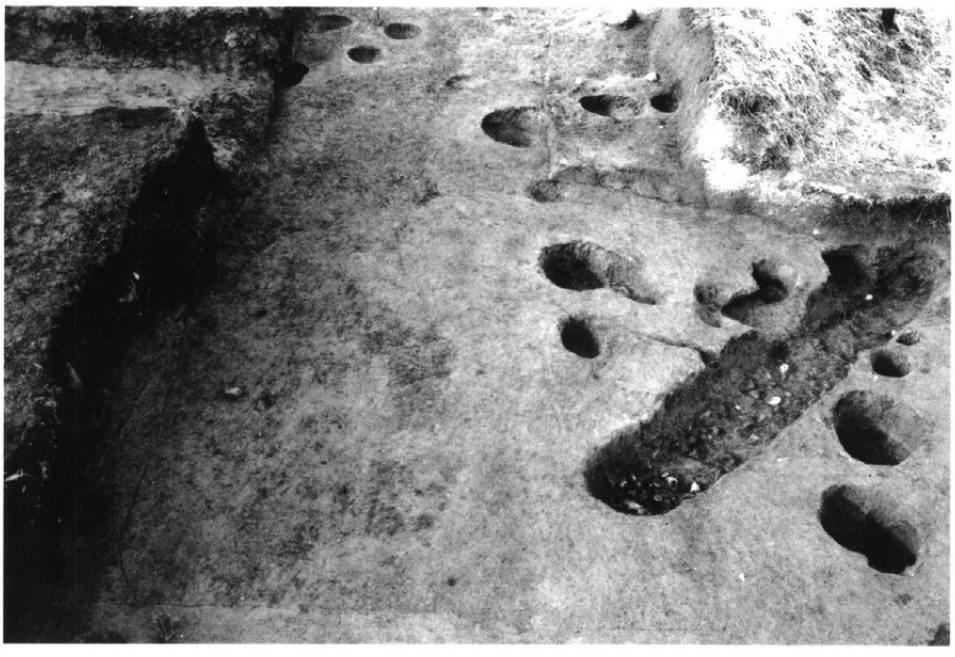


SB12

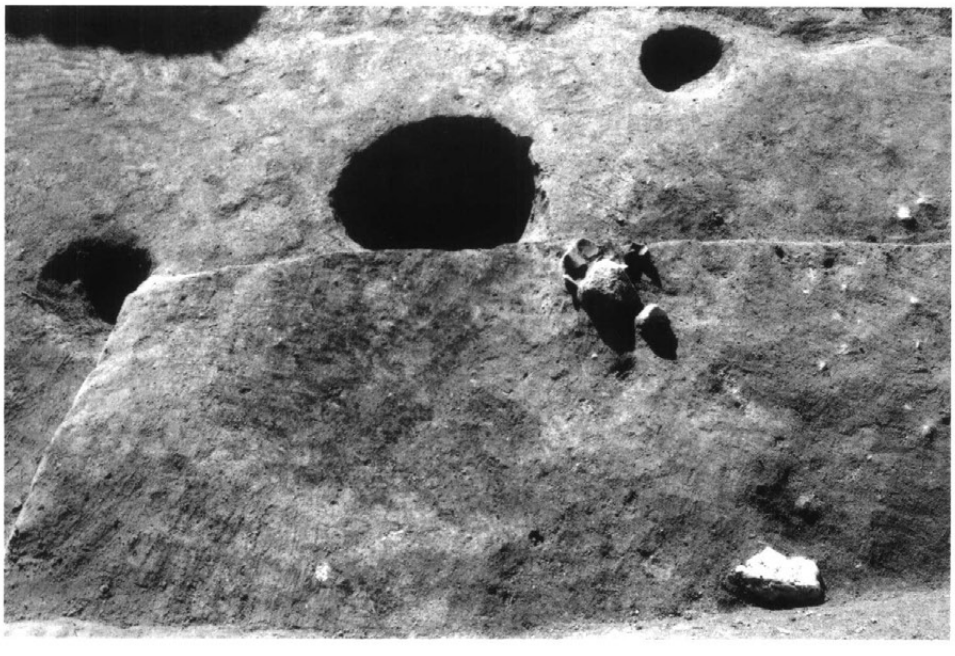


SB16

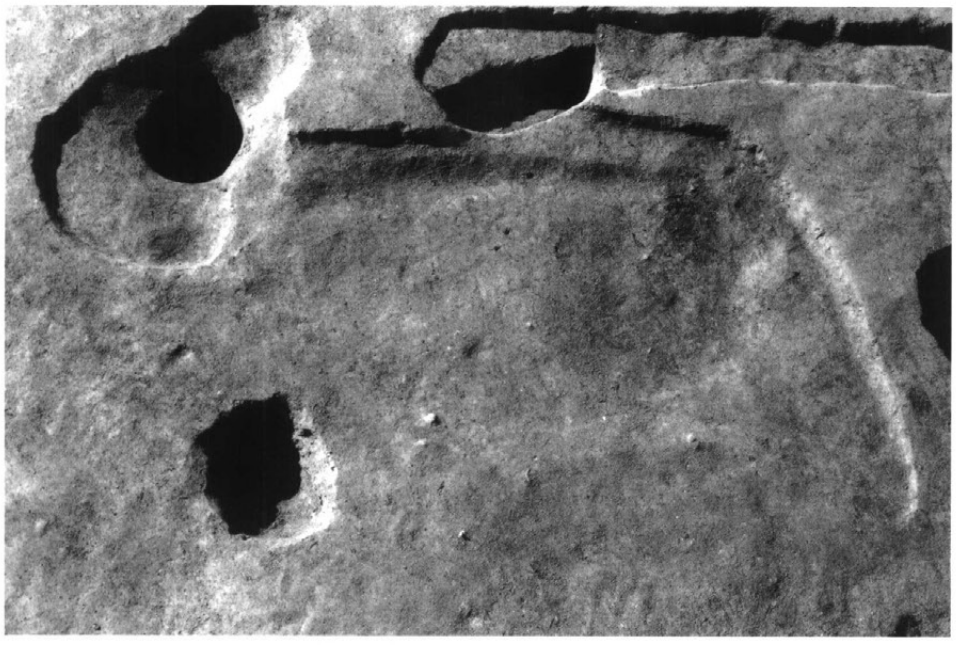
図版 8



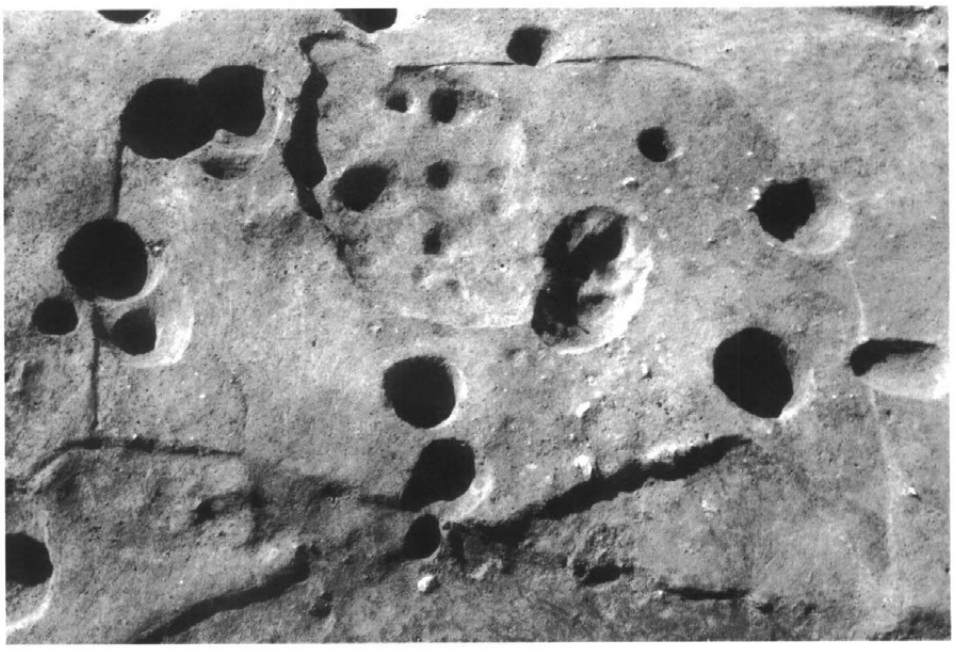
SB17



SB17
遺物出土状況

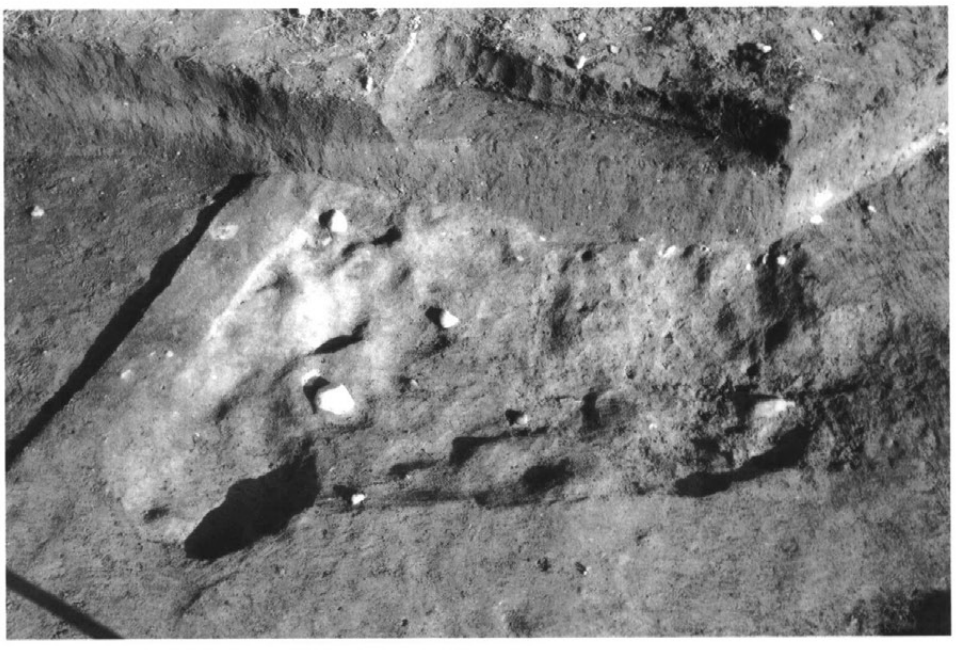


SB19



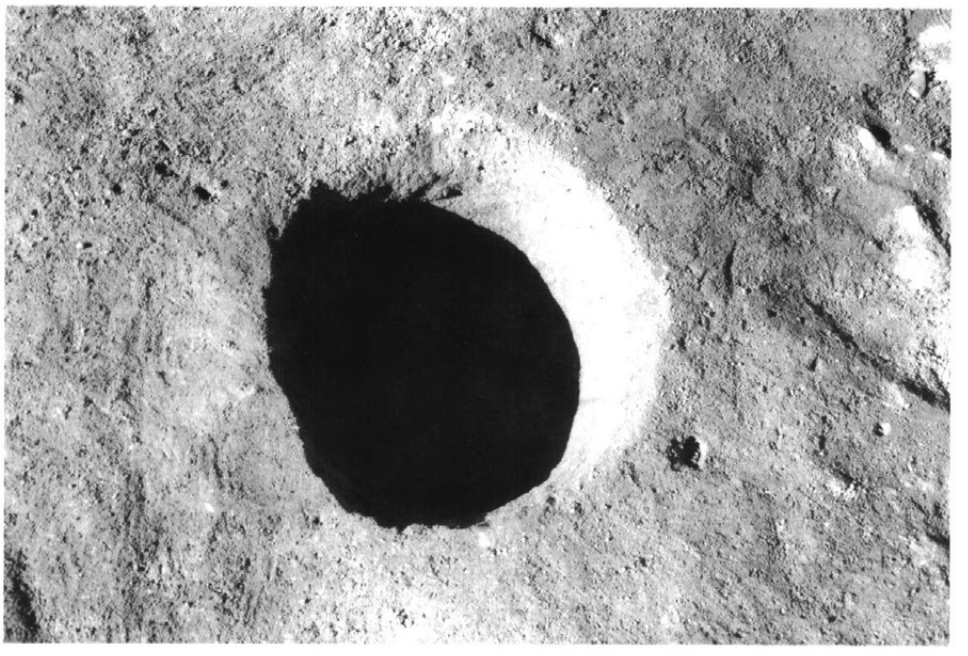
SB10

SB18

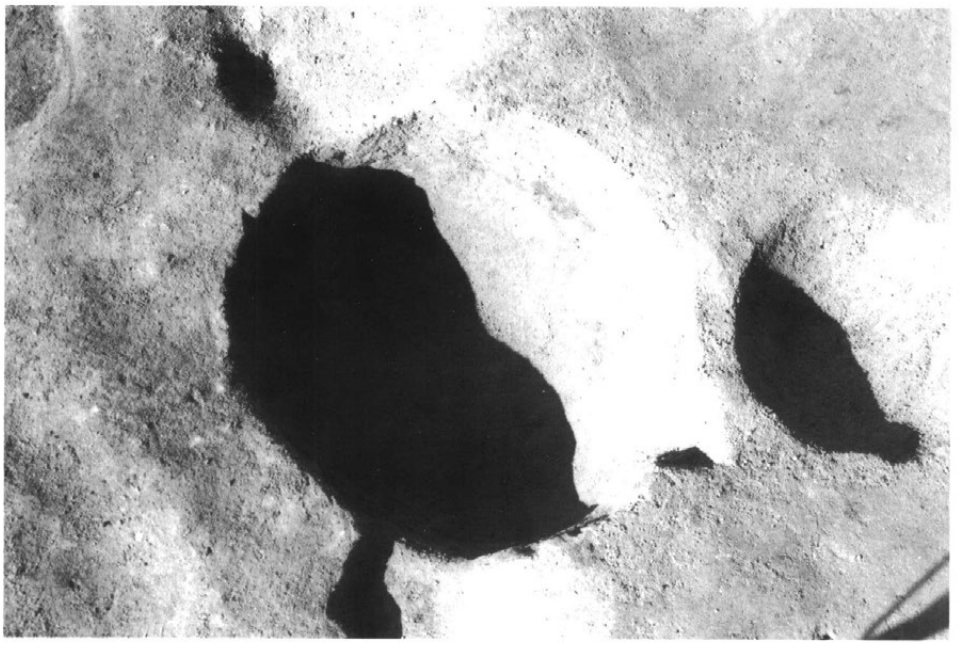


SX01

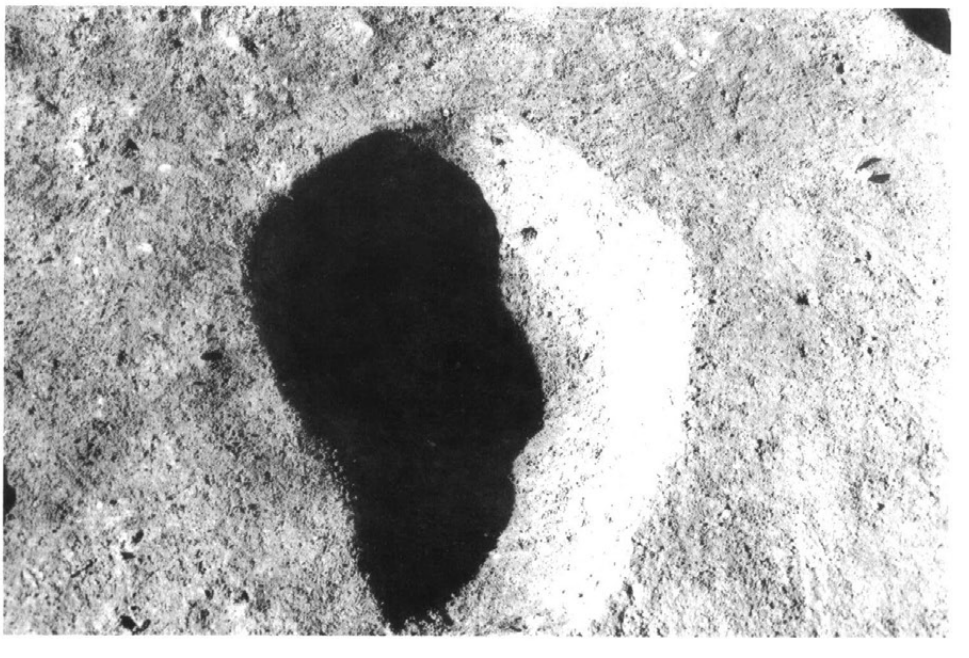
図版10



SK01

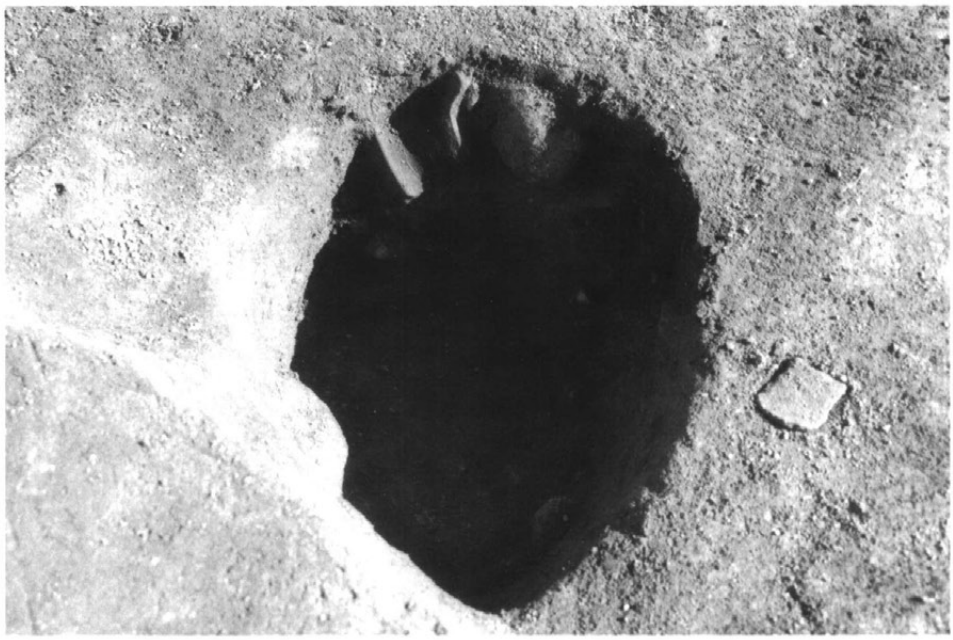


SK02



SK03

SK04

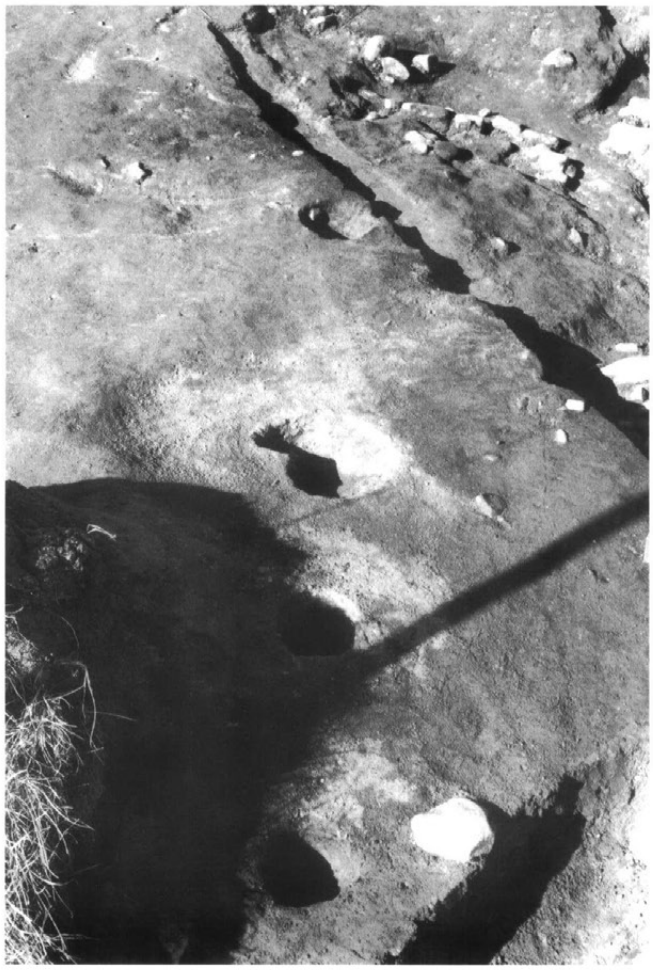


SK05

SK07

図版12

ST01

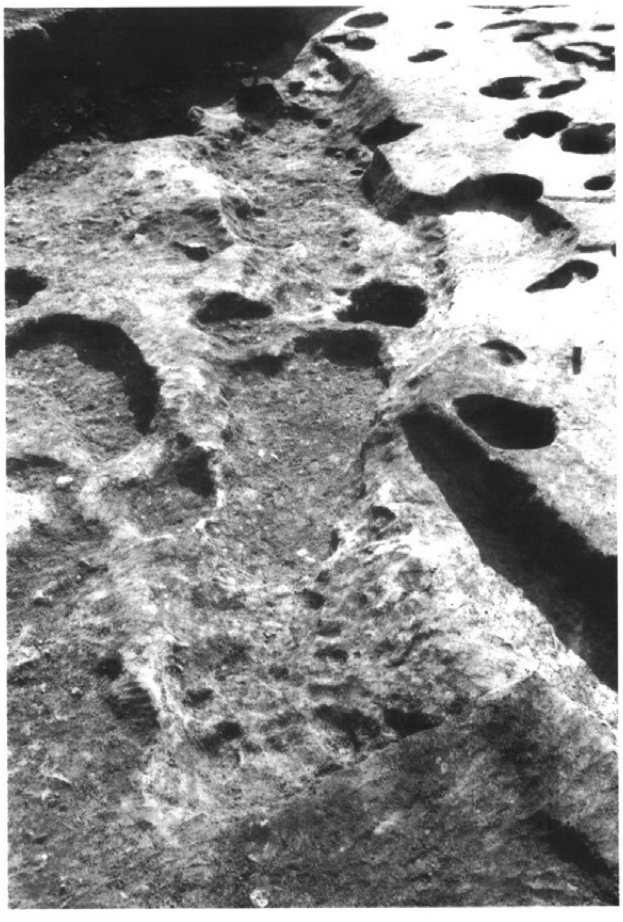


ST02

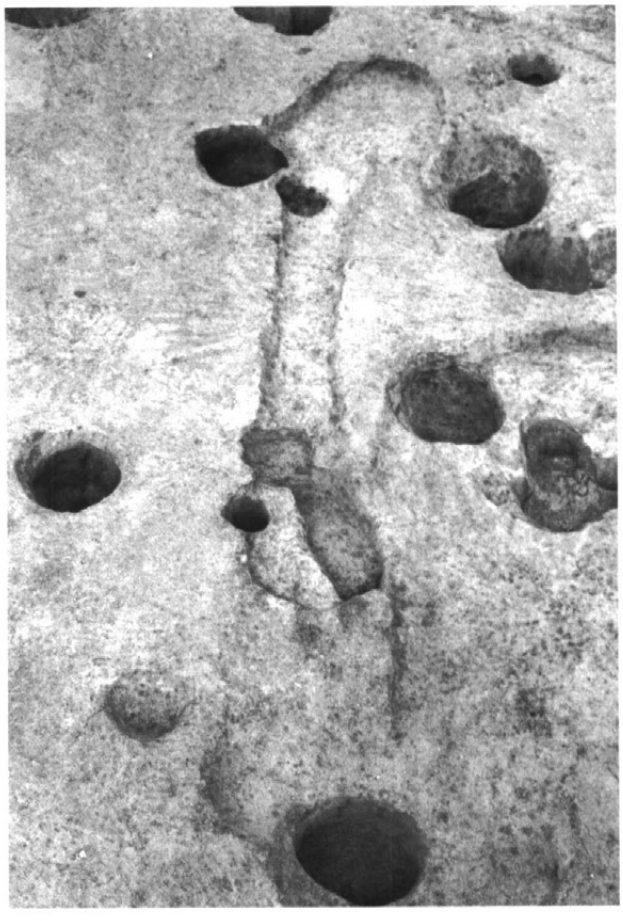
ST05

ST03

SD05



SD06



SD07

図版14

氾濫原

重機作業風景

同　上

基準点設置作業

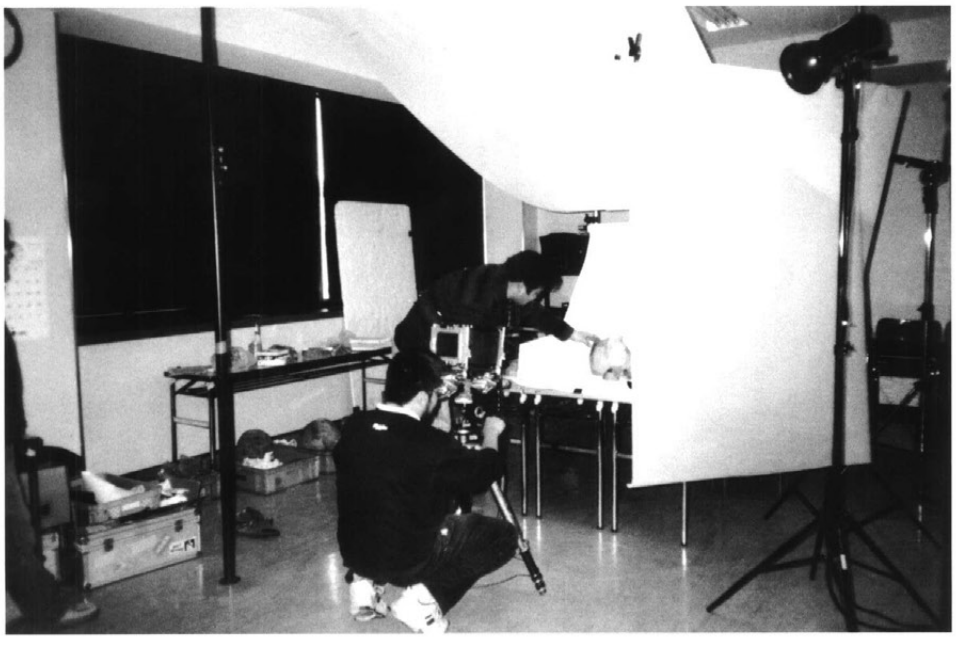
作業風景

同　上

図版16

作業風景

整理作業風景



委託写真撮影（遺物）

SB05　出土遺物

SB06　出土遺物

SB06　出土遺物

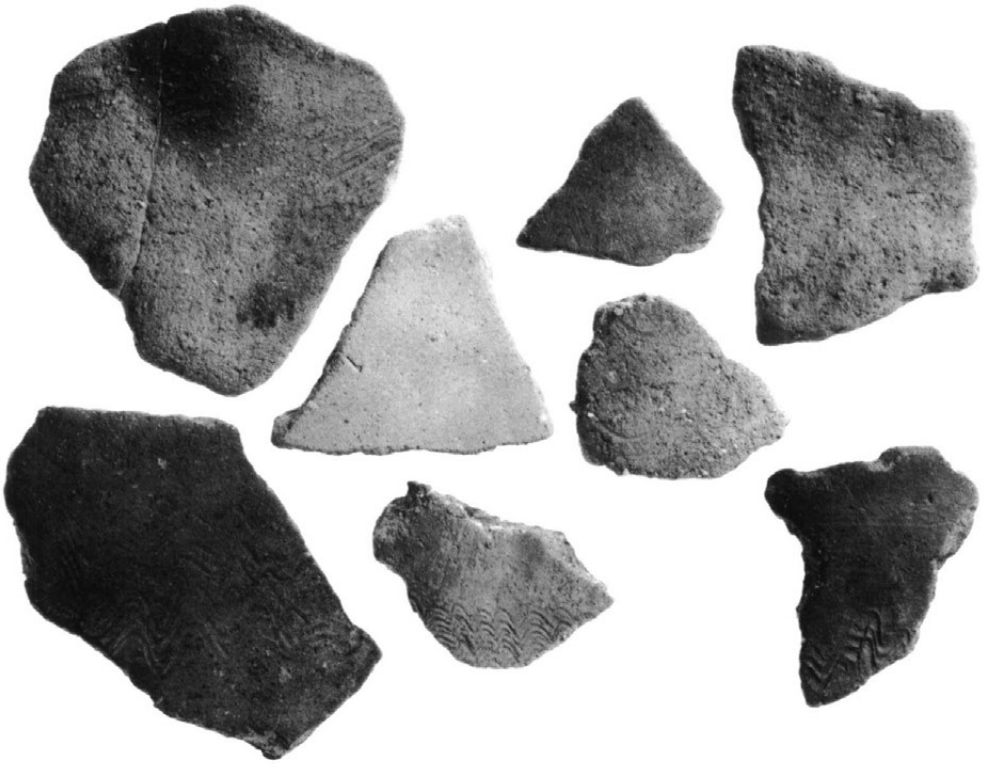
SB08　出土遺物

SK04　出土遺物

氾濫原　出土遺物

遺構外　出土遺物

遺跡出土　弥生土器（中期）



遺跡出土　弥生土器（後期）

遺跡出土　石器

報告書抄録

ふりがな	ままし たいせき
書名	ママ下遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂井勇雄　羽生俊郎
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395−0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　Tel 0265−53−4545
発行年月日	2003年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ままし たいせき ママ下遺跡	いいだしかみさと 飯田市上郷	20205	35度 32分 37秒	137度 53分 9秒	2001年 11月19日 ～ 2002年 1月17日	730㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ままし たいせき ママ下遺跡	集落址	古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居址　12軒 建物址　3棟 土坑　2基 建物址　1棟	弥生土器 石器 土師器 須恵器	土曽川の氾濫原と、それに隣接する古墳時代後期の集落址の一部を確認した。 弥生時代から奈良・平安時代にかけて長期間生活域として利用された大規模な集落遺跡

マ マ 下 遺 跡

2003年3月20日　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯 田 市 教 育 委 員 会

印　　刷　杉 本 印 刷 株 式 会 社